大館市史編さん調査資料第7集

大館市釈迦内・橋桁

福館遺物包含地
橋桁野竪穴住居址
発掘調査概報

1973－5

大館市史編さん委員会

48

大館市

釈迦内福館遺物包含地
橋桁橋桁野竪穴住居址

1973－5

第　1　部

福館遺物包含地

正　誤　表

ページ	行	誤植	訂正
PL目次	14	FdIJ・JT	FdIT・JT
4	PL 1	Opf1	Opfa
10	PL 6	46 48	写真を削除
〃	PL 6	(説明) 40～48	40～45
14	PL11	(写真) 下段	(左) 5　(右) 1
〃	PL12	(写真) 上段中央4	6
〃	PL12	(説明) 7～9	6～9
15	PL13	Fig 4 (1b)	Fig 4 (3)
17	PL15	(写真) 下2段圧45	56
48	12	泥岸	泥炭
〃	19	Corbiculo	Corbicula
〃	20	Ostrea bed	Corbicula bed
〃	終	八郎潟の場合	八郎潟底の場合

口絵＝福館―橋桁野遺跡の十字路
(右手前から　中央上方へのびるのが　旧街道)

例　　言

1　この報文は　1971年11月（昭和46年）晩秋から開始し　翌1973年４月（昭和48年）春に終了した　市北部地区の福館遺跡と旧道を距てた　連続地区の橋桁野縄文期竪穴住居址についての調査概報である．各遺跡の記述は　第１部と第２部にわけ記載する．

2　調査の責任者は　市長石川芳男　であり発掘担当者は　当時市史編さん及び専門委員奥山潤である．

3　報文の執筆は奥山により　竪穴写真は奥山及び市史専門委員山田福男　遺物撮影は写真家越前貞一氏による．

4　この報文は筆者の都合と怠慢により　単なる報告であり　詳細な研究内容を含まない．

5　なお　両遺跡の位置　地形については　それが同一地点であるため　第１部の緒文とともに第１部・第２部のその項を　兼ねることにしたい．

目　　次

例　　言
第 1 部
Ⅰ　緒　文 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と地形・地質 …… 3
Ⅲ　福館遺跡の発掘 …… 5
A　発　掘 …… 5
B　出土遺物 …… 5
1　土　器 …… 5
2　石　器 …… 18
Ⅳ　考　察 …… 19
第 2 部
Ⅰ　緒　文 …… 29
Ⅱ　発掘調査 …… 29
1　B住居址 …… 30
2　A竪穴住居址 …… 35
3　出土遺物 …… 36
a　土師器 …… 36
b　縄文土器 …… 37
Ⅲ　考　察 …… 46
A　土器について …… 46
B　住居址について …… 47
C　当時の気候について …… 48
総　　括 …… 49

Fig 目　次

Fig 1　遺跡位置図　2
Fig 2　遺跡附近地籍図　3
Fig 3　福館発掘トレンチ略図　6
Fig 4（1 a）Bトレンチ出土土器拓影　7
Fig 4（1 b）A－Hトレンチ出土土器拓影　21
Fig 4(2)　Iトレンチ出土土器拓影　22
Fig 4(3)　I・Jトレンチ出土土器拓影　23
Fig 4(4)　J・Kトレンチ出土土器拓影　24
Fig 4(5)　M・Nトレンチ出土土器拓影　25
Fig 5　福館遺跡出土石器(1)　26
Fig 7　橋桁野竪穴全体図　折込
Fig 8　A竪穴上層位出土土師器　36
Fig 9　A竪穴出土土器（拓影）　40
Fig 10　A竪穴出土土器（拓影）　41
Fig 11　A竪穴出土土器（拓影）　42
Fig 12　A竪穴出土土器 1（拓影）　43
Fig 13　A竪穴出土土器 2・3（描図）　44
Fig 14　A竪穴出土土器 4・5（〃〃）　45
Fig 15　土器 2・3・4 拓影　45

PL目　次

口　　絵
PL 1　橋桁野にみられた大湯浮石層　4
PL 2　Fd. AT出土土器　7
PL 3　Fd. BT出土土器　8
PL 4　Fd. CT出土土器　8
PL 5　Fd. DT出土土器　9
PL 6　Fd. FT出土土器　10
PL 7　Fd. GT出土土器　10
PL 8　Fd. HT出土土器　10
PL 9　Fd. IJ出土土器　12
PL 10　Fd. IT出土土器　13
PL 11　Fd. IT出土土器　14
PL 12　Fd. IJ・JT出土土器　14
PL 13　Fd. JT出土土器　15
PL 14　Fd. JT出土土器　16
PL 15　Fd. KT出土土器　17
PL 16　Fd. MT出土土器　18
PL 17　Fd. NT出土土器　18
PL 18　石器・石製品（一部）　20
PL 20　B住居址床面　31
PL 21　B住居址の床面と出土土器　32
PL 22　B竪穴炉南部　32
PL 23　B住居址炉跡　33
PL 24　B住居址床面とA竪穴の切込み部分　34
PL 25　B住居址南端部の床面と発掘作業　34
PL 26　A竪穴（北より）　50
PL 27　A竪穴（東より）　51
PL 28　A竪穴北東側　52
PL 29　A竪穴炉址（南より）　53
PL 30　A竪穴炉址とその北東側　54
PL 31　A竪穴南西区の遺構　54
PL 32　A竪穴壁側床面　55
PL 33　A竪穴ピットの 1　55
PL 34　A竪穴出土土器　56
PL 35　A竪穴出土土器　57
PL 36　A竪穴出土土器　58
PL 37　A竪穴出土土器　59
PL 38　A竪穴出土土器　59
PL 39　A竪穴出土土器　60
PL 40　A竪穴出土土器　60
PL 41　雪の旧街道　61

I　緒　　文

大館市福館・橋桁野遺跡は　国鉄大館駅より北々東に　国道第７号線を約８km　国道西側の長者森と呼ばれる　独立丘の南麓を左折して　長面袋の集落と連絡する道が　下内川にそい市内釈迦内から橋桁に至る　市内で最も旧い姿を止める　旧街道(口絵)と交差する地点にある.〔Fig1〕

この遺跡は　1977年秋ごろ　高橋昭悦・小山純夫の両名により　この地区の北部一帯の探査により発見されたもので　そのうち　橋桁野遺跡については　既に奥山・高橋・小山らにより　一部の発掘が行なわれ報告[1]されているが　その後大館鳳鳴高校社会部考古学班の協力もあり　一部発掘が行なわれた.

今回の調査は　更に情報を追加する目的で　弘前大学教育学部考古学研究室の　三浦・杉山・桜井君らの協力を得て　大館鳳鳴高校社会部考古学班・仝桂高校社会部考古学班の諸君の参加により実施されたもので　福館遺跡については　出土遺物の有力な資料の追加を　橋桁野については　思いがけぬ竪穴群の一部を発掘することができた.

この両遺跡の間の細い道を　天明５年(1785)秋のころ　片雲の風に吹き晒された一人の旅人が矢立峠を越えて　津軽から　秋田領内に入った. ８月22日　長走に宿ったこの旅人は　長い旅の日記の中でも　もっとも悲惨な記事を残して　白沢から釈迦内をへて　大館に入った.[2]　白沢から釈迦内に入るには　必ずしも直路によらず　花岡本郷を通過してもいい.　だがここではその人が　われわれが春秋調査をした　この遺跡の中央を　下内川の流れに沿って　南北に通る細い道を過ぎたのだ　と想像することを許されたい.

この遺跡附近は　稀にみる大遺跡地帯であるが　南の芝谷地附近に一ケ処　登録遺跡があるだけで　一向に知られていない. その原因は種々あろうが　注目すべき地帯である.

特に　火砕流の第２次層(シラス)上の腐植土中　最も古期の縄文遺物は　いつごろまで遡り得るか　北の矢立風穴高山植物群落　南の芝谷地湿原の両天然記念物[3]にはさまれた　この地帯の解明は　重要資料を提供する可能性のゆえに　更に細部にわたる点検を必要とするであろう.

---

(1)　奥山　潤・高橋昭悦　円筒下層ａ式およびその直前の土器(大館市周辺の状況)「秋田考古学」27　1968
　　奥山　潤　　福館遺跡 ― 大館市の縄文前期前半 ―「北海道考古学」　第６輯　昭44・３
(2)　菅江真澄　　外が浜風
(3)　われわれは　これを一種の glacial relics とみている.

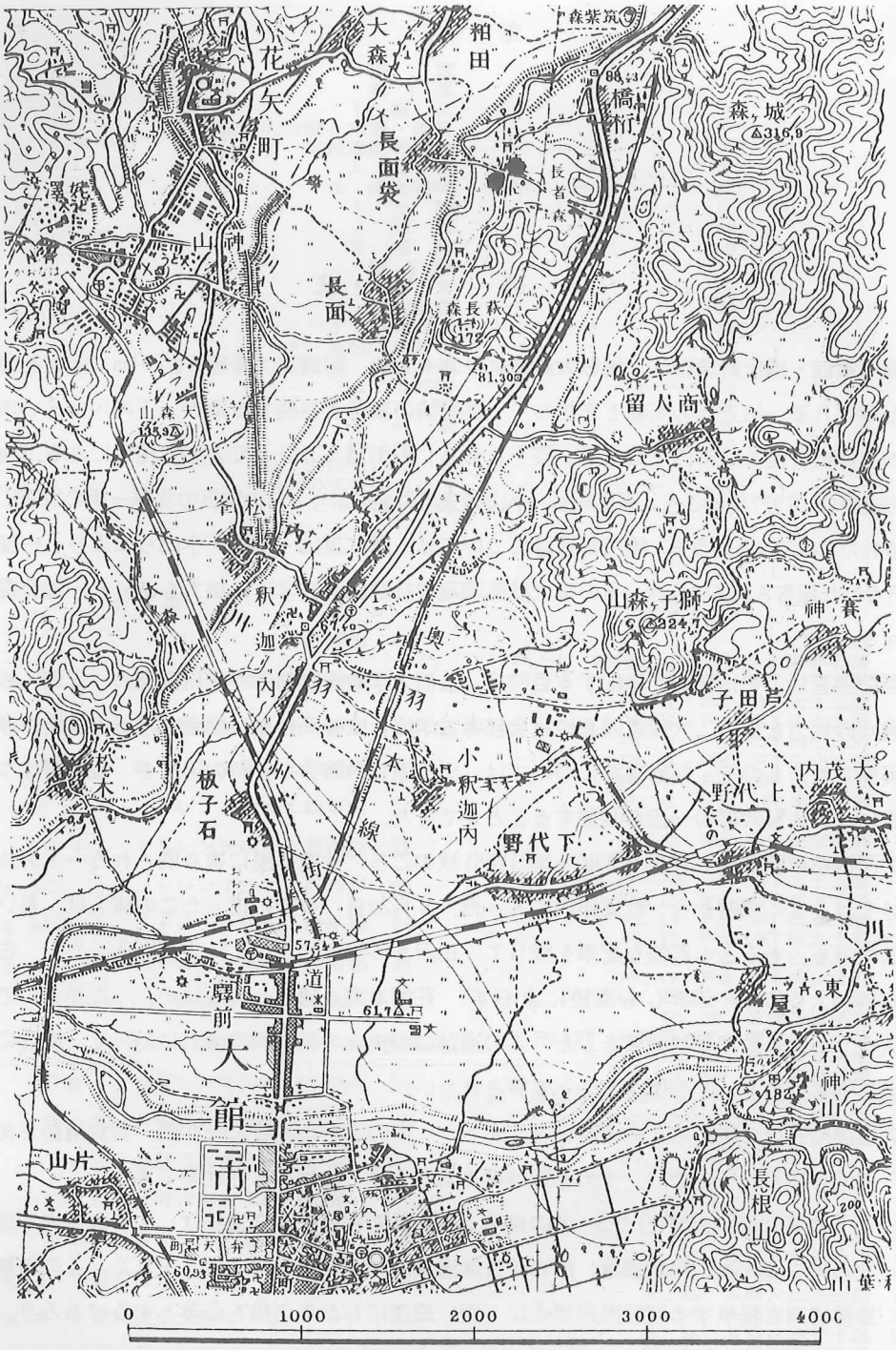


Fig I　遺跡位置及地形図

●印遺跡（国土地理院承認番号昭和48年第366号）

Ⅱ　遺跡の位置と地形・地質

福館遺跡と橋桁野遺跡(第1号遺跡)は　その西側を南流する　下内川に密着している．下内川との間に　段丘中位面があるが　そこは河岸の侵蝕面である．

下内川は　市行政区北端の　県境に平行に東流し　陣場の北から南に流路を変える．

下内川とは　おそらく　アイヌ語のSumnay(西・川)で　もしそれが正しいとすれば　陣場北部の　南に流路を変更した地点以南に　下内川の名はふさわしくない．

この川の上流区域は　雨量の多いことで知られ　いつもは河原石を晒し　伏流が多いが　突如増水する荒れ川である．川は大館市片山の二ツ山の北麓で　長木川に合流する．

合流点附近では　わずかに西流するから　あるいは　O・Sum・nay〔入口・西(に向く)川〕かもしれない．

遺跡の位置は　長面袋から東へ　国道と結ぶ旧道が　旧街道とクロスする地点の両側で　元の釈迦内村と　矢立村の村境をはさんでいる．〔Fig 2〕

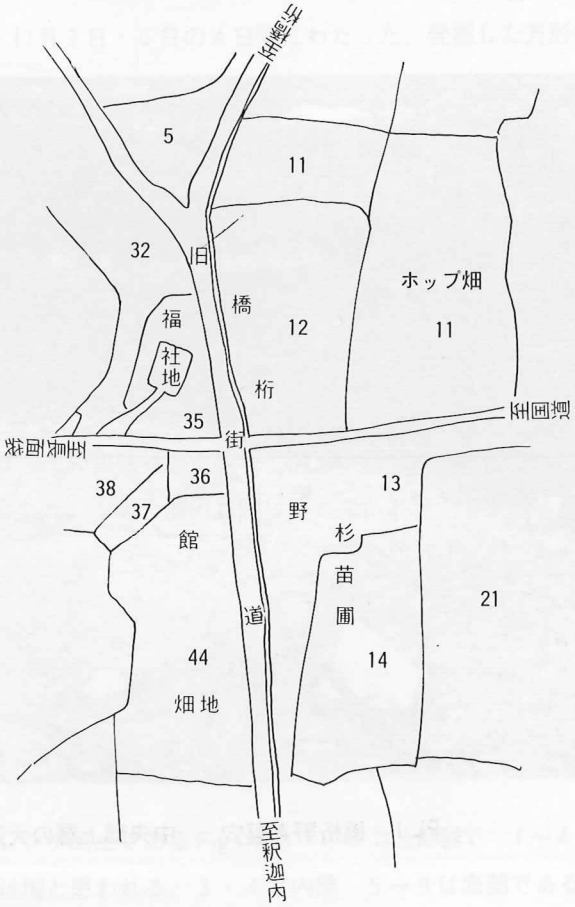


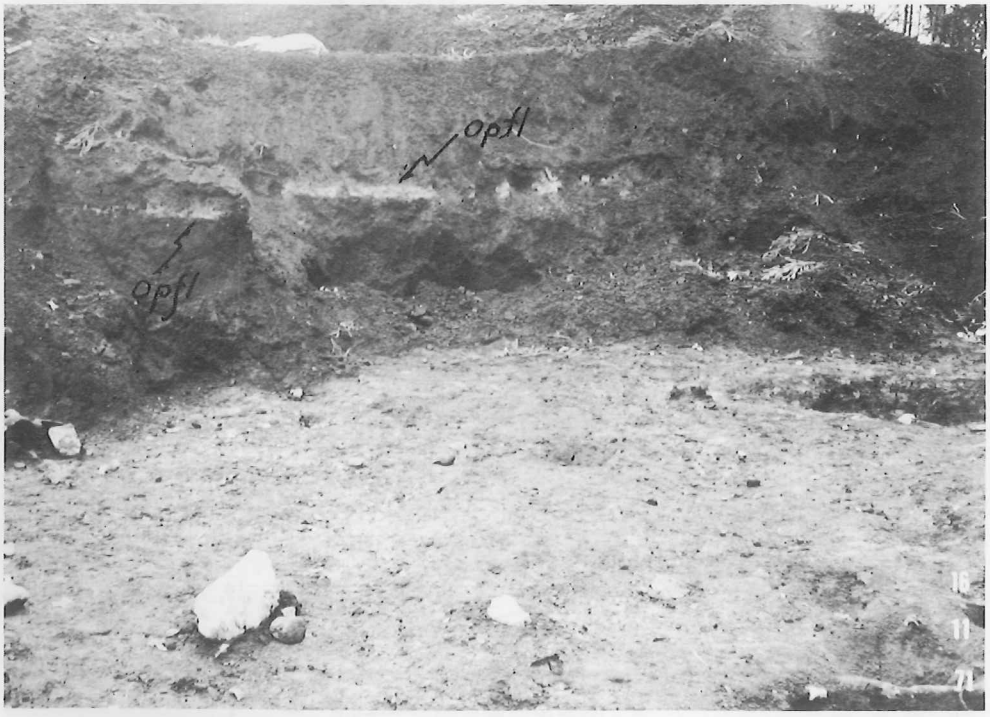
Fig 2　遺跡関係地籍略図
(旧街道東側橋桁野・西側福館)

福館は一種の館状の構造であり　また附近の老人の語るところによれば　北の近距離に小高い台形の土地があり「サカダテ」と呼ばれていたが　明治時代に　開拓のため地ならしをした　と伝えられる.

下内川にわずか近いせいか　福館遺跡の一部は腐植土がうすく　橋桁野(第1号)は厚い.(平均70cm) その理由の一つとして　両遺跡の道路側は　道路を作る際に　掘り下げた黒土を盛りあげて　地ならしした形跡がある. 十字路のところで　道は　下内川岸に向って急斜するため　周辺よりかなり低い.

遺跡のある台地は　平坦で広く　下内川よりの比高約10mであり　地盤は火砕流の第2次層であり　その上に褐色土層が堆積し　上位層は黒色腐植土であるが　この上位層には　大湯浮石層を挟む. この浮石層は　一部ラピリ大で　一部は微粒砂状である. 大湯浮石層は　遺跡北部の白沢附近から　南は市中央部の達子森を結ぶ線あたりまでに分布し　大体このあたりが　降下区域の西縁であろう. PL1はこのうち　橋桁野竪穴の中央上層位に見られた大湯浮石層である.

なお福館遺跡は　地表下40cm～50cmで　褐色土層に達し　以下20cm～30cmで　シラス層が出現する. 橋桁野A竪穴は　地表下1.5mで床面に達したが　B住居址床面はこれより　20cm～30cmほど高い.



PL1　橋桁野A竪穴　　中央部上層の大湯石層(←印)

Ⅲ　福館遺跡の発掘

A　発　　掘

先に　奥山・高橋・小山らが発表した福館遺跡の出土遺物は　Fig 2の福館44番地の南半区域から　部分的に包含地を探査したもので　ここに報告する発掘遺物は　上記地点の北部に当る区域からの　出土である．

この畑地は　処々に杉苗畑や　果樹の畑を含み　かっては果樹園であったと聞く．従ってその地表浅いところからの出土遺物には　層位的な信をおき難い．ただFig 4の各図やPL 2～に示したように　各方形発掘ヒットから出土した遺物は　それぞれ　あるいは大きな　あるいはわずかの時差を示している．これらについては　一部の知見を述べるにとどめ　ほとんど簡単に記載をしておく．なお出土土器中　風化がひどく　日に晒され　再び耕起によって埋没混入したように思われる遺物は　一切除外した．

これら遺物には　竪穴ほか　或種の遺構などに伴出するものと考えられるが　畑地耕作の都合から　全面的発掘は不可能であった．

発掘は1971(昭46)10月29日・30日・11月3日・6日の4日間にわたった．発掘した方形のヒット名は次のとおりである．

10/29　A・Bトレンチ

10/30　C・D・Eトレンチ

11/3　F・G・H・I・J・Kトレンチ

11/6　L・M・Nトレンチ

10/20～10/30の両日は　弘前大学考古学研究室の学生杉山・桜井両君による．奥山が地点を指示して　層序につき諸注意を与えた．11/3・11/6は　上記両君のほかに　大館鳳鳴高校社会部生徒の数名を加え　杉山・桜井両君を中心により作業をすゝめた．

このうちE・Lトレンチ出土遺物は　その包含状況が散慢で　この報文では採用しない．各発掘地点については Fig 3 に見取図を示した．なお土器の類別は行わないまま　出土遺物の代表的なものを　トレンチ毎に提示した．

B　出　土　遺　物

1　土　　器

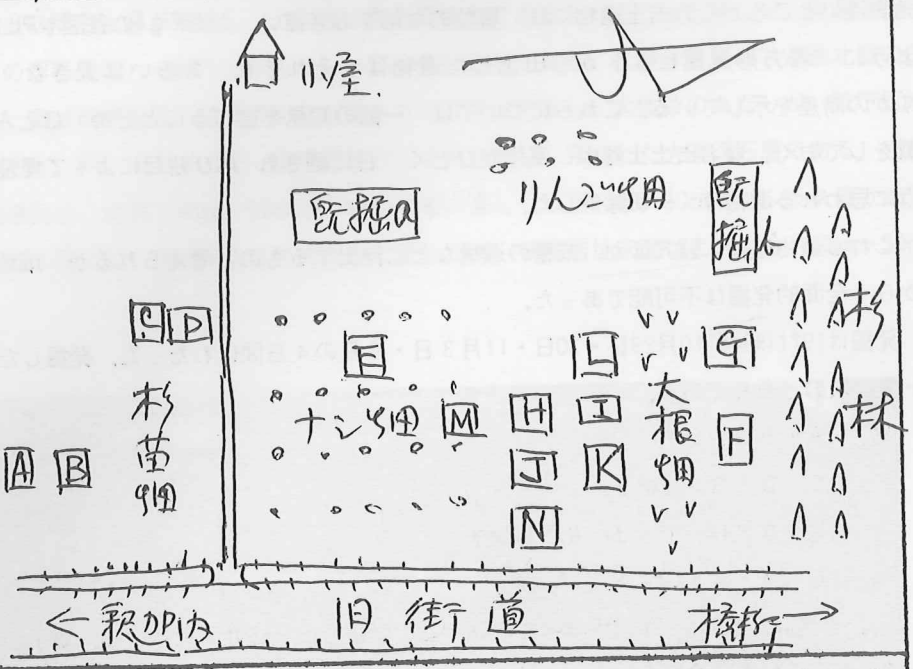
a　Aトレンチ

Fig 4 (1 b) 1～9　PL 2は　Aトレンチ出土であるFig 4 (1) 1～9 は土師器で　1～4は口縁物破片．1はカメで2・3は坏　4は埦と思われる．3・4は内黒　5～9は底部であるが　う

調査日誌　　大館市教育委員会

地点	福館 #44	昭和46年10月29日 11月6日		天候	雨 後半晴
編成	担当者 奥山	調査員	木村井 杉山		大館圓島 大鉄桂

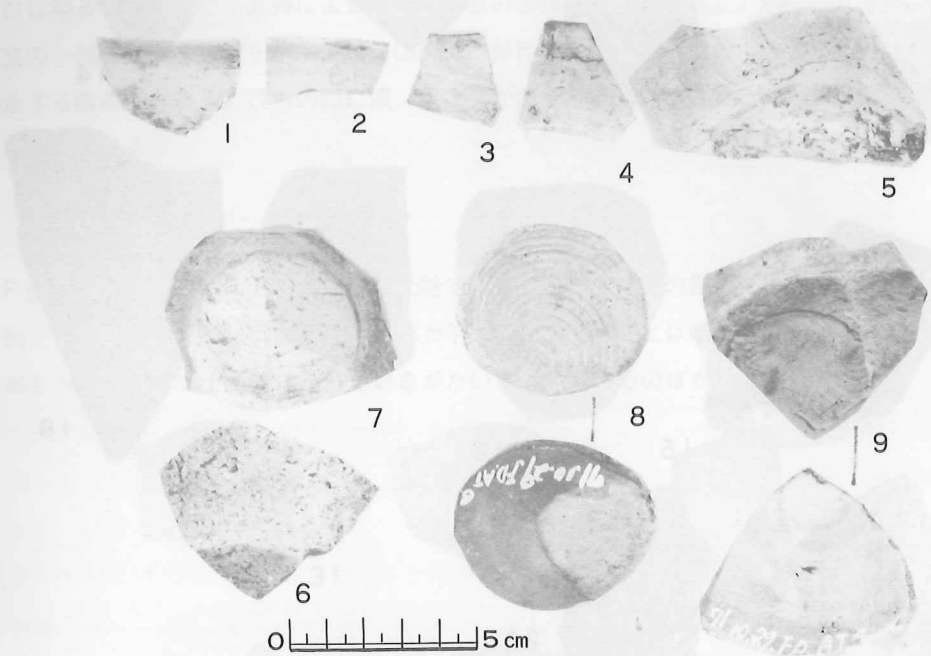
調査要項



出土遺物	各トレンチ1.5m平方ないし2m平方のピット状トレンチ 記号 Fd. AT～とする。(杉苗畑) 2個所の既掘trenchは、奥山、高橋、大鉄圓島 高校による。aに於て、隆帯下に縄をめぐらした土器片出土する。これは田下b式ではない。
備考	A、Bトレンチには土師器(糸切底)小ゆえ、後世C2式なとて Eトレンチ、Lトレンチ出土品 所位不定。 他は縄文一条痕文を混えた せんい土器片、完整品なし。 北側 杉林に近く、稀に中期土器片出土する。

Fig 3　福館発掘ヒット略図

ち6～8の3個は　内黒である．色沢はいずれも橙色　または灰味をおびた黄褐色．このトレンチには　土師器以外の土器は発見されていない．おそらく土師器を含む竪穴の一部と考えられる．



PL 2　Fd. AT出土器(1－9) Fig 4 (1 b)

b　Bトレンチ

Fig 4 (1 a・1 b) PL 3 は Bトレンチ出土器である．10～20は　すべて縄文土器である．10・11は口縁部．16・17以外のすべての土器は　胎土に繊維を含み　10の内面には　横走する細かい貝条痕がある．

16・17は　他と時期を異にする土器である．

Fig 4 (1 a) は　上層位から出土したもので　左は後北C_2式　右2片は　小坂X式土器である．小坂X式土器の編年位置か　後北C_2式に近接することを　示している．後北C_2式土器が発見されたのは　大館地方としては最初の例である．

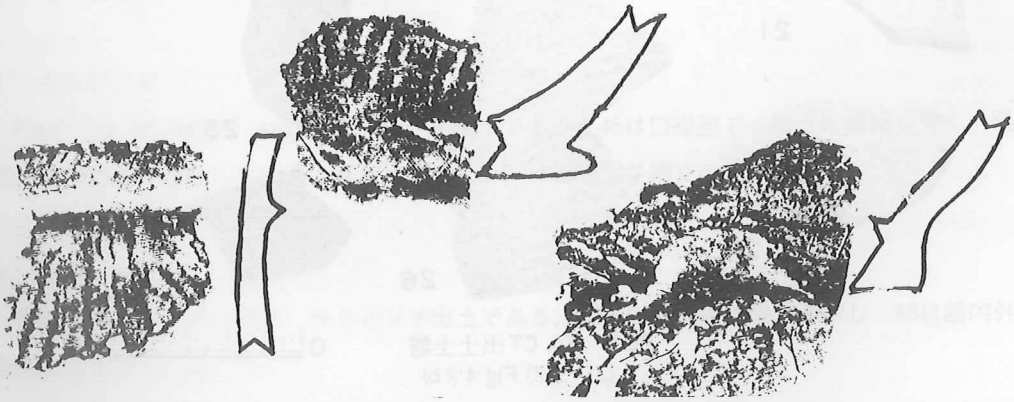
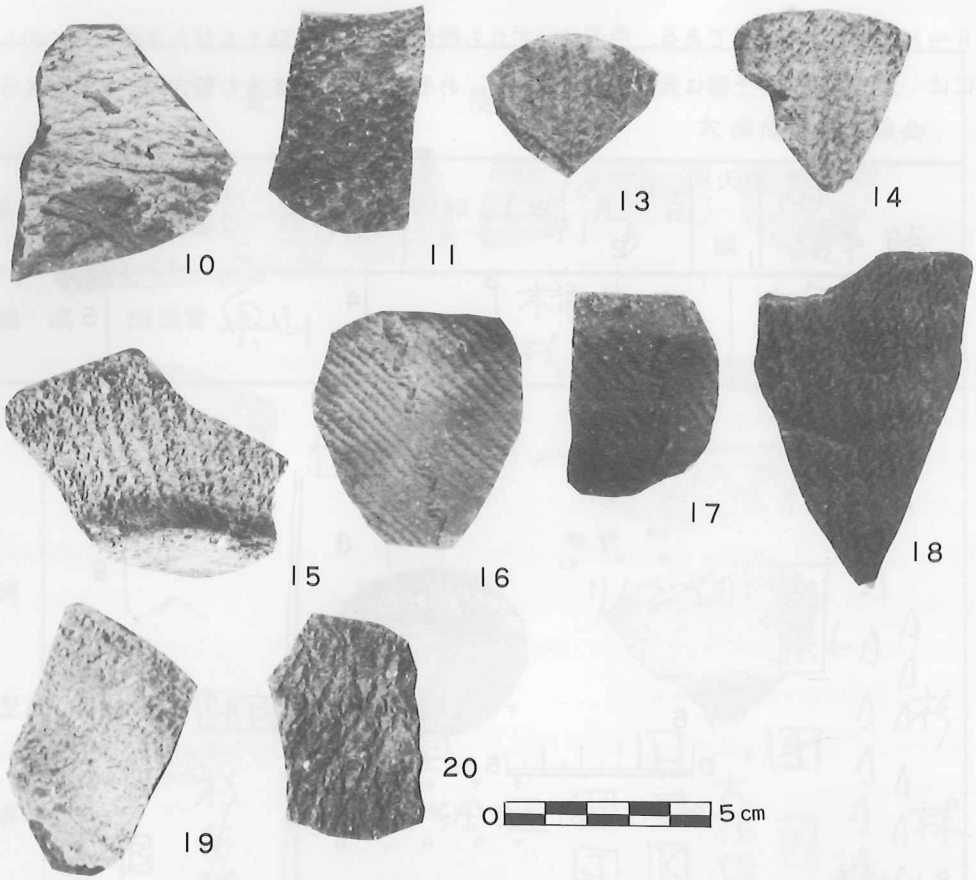
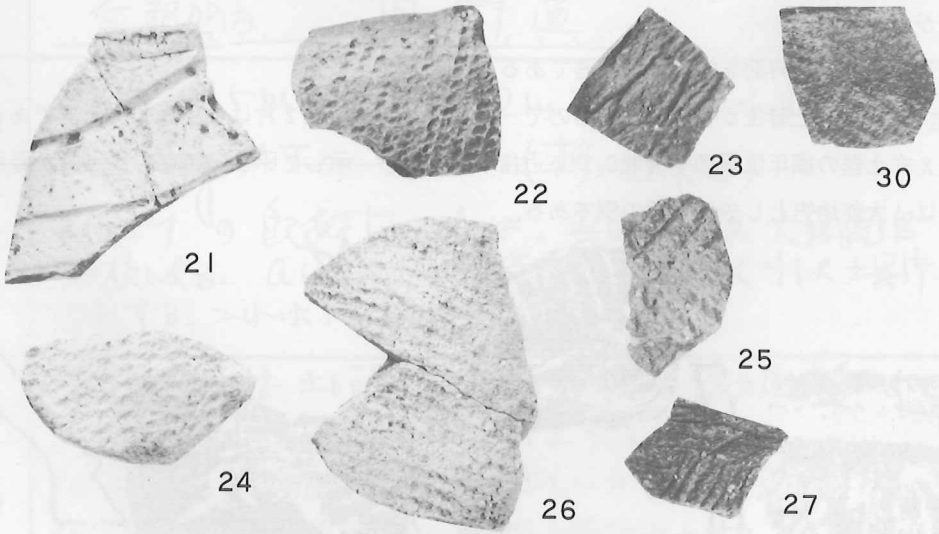


Fig 4 (1a) Fd　Bトレンチ出土土器　左　後北C式土器．右　2個小坂X式土器



PL 3　Fd. BT出土土器
(10～20) Fig 4 (1 b)



PL 4　Fd. CT出土土器
(21～27) Fig 4 (1 b)

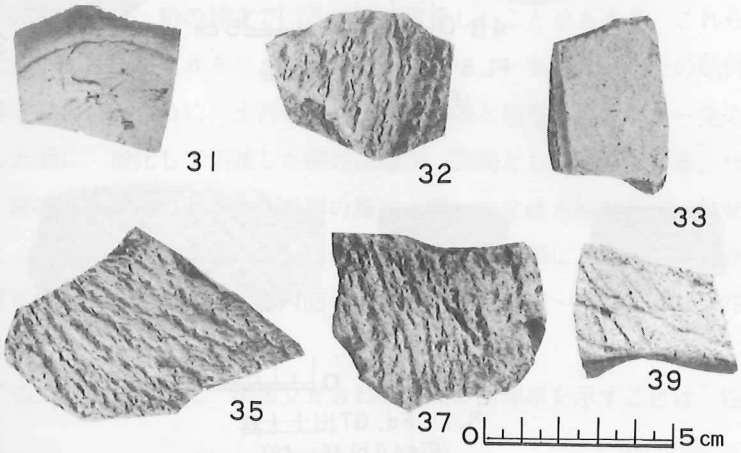
c　Cトレンチ

Fig4（1b）　PL4 の21～30・54は　Cトレンチの出土である．

21は明るい橙灰色で　丸棒による　やゝ太目の沈線文が　浅い縄文の地に施文されている．沈線文の一部分は　曲線文を示す．22は口縁で　斜行する撚糸文（？）が施文され　23はの内面には横走する条痕文がある．27も内面に浅い条痕文がある．23・26等は胎土に特有の白色細粒（軽石？）を混在する．

d　Dトレンチ

Fig4（1b）　PL4はDトレンチ出土土器である．31は土師器の底部．他は33を除いて　撚糸文が施文されている．33は口縁部か　体部か不明であるが　他とは時期を異にするものであろう．なおEトレンチの出土土器は　信をおきがたい包含状態のものばかりであった．



PL5　Fd. DT出土土器
(Fig4(1b)31～33・35・37・39)

e　Fトレンチ

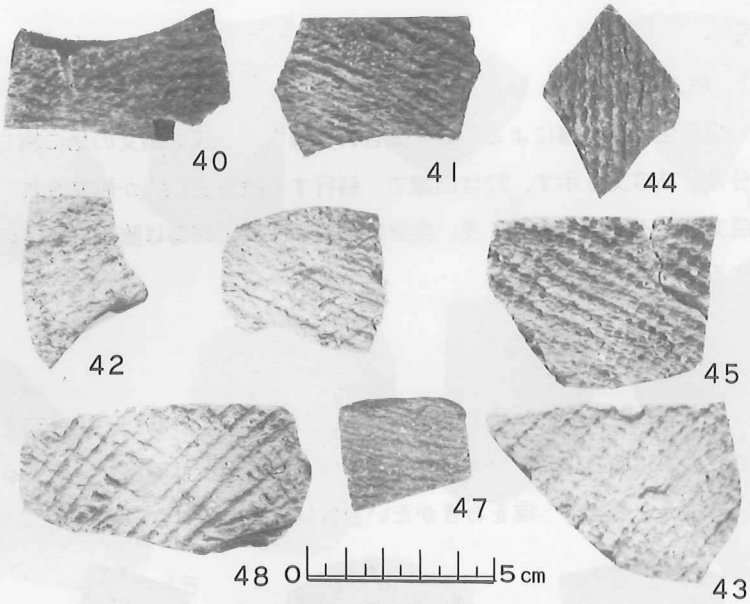
Fig4(1b)　PL5の　40～44の4個は　このトンンチの出土である．40～43は　いずれも口縁部焼成よく硬いが　42・43は胎土に繊維の混入がやゝ多い．

f　Gトレンチ

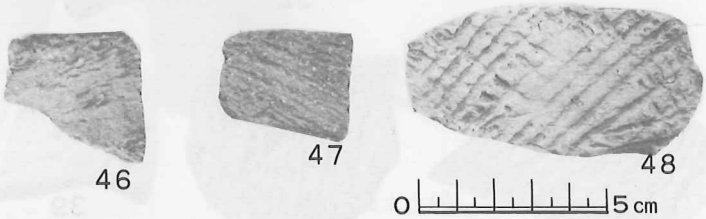
Fig4（1b）PL6の45～48は　Gトレンチ出土である．45は口縁部で　胎土に繊維が多く　他の撚糸文土器は　混在しないか　きわめて少ない．48は附加条縄文の好例である．

g　Hトレンチ

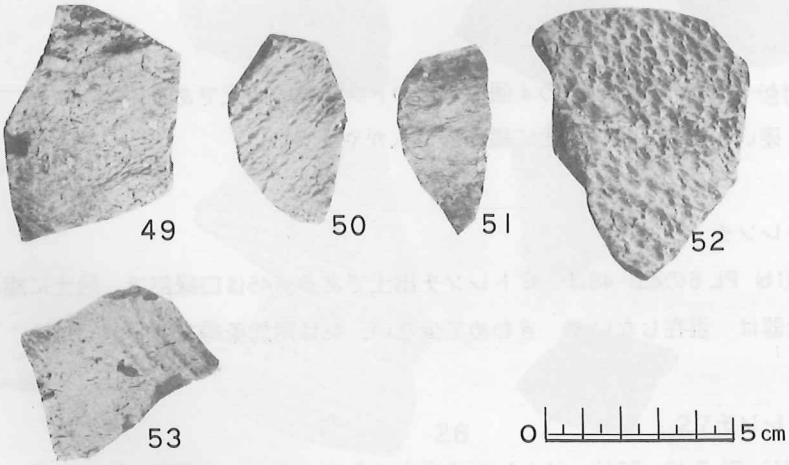
Fig4（1b）PL7 49～53は　Hトレンチ出土である．48・51は複雑な施文を示し　48は器内外に条痕文を加えている．



PL 6　Fd. FT出土土器
(Fig 4 (I b) 40～48)



PL 7　Fd. GT出土土器
(Fig 4 (I b) 46—48)



PL 8　Fd. HT出土土器
(Fig 4 (I b) 49～53)

h　Ｉトレンチ

Fig 4 (2)　1～30・Fig 4 (3) 1～5 PL 9～12はＩトレンチ出土土器である．このうち　Fig 4(3) 1～5は　下層位の出土土器である．

Ｉトレンチのグループには　特に土器内面に　貝殻条痕文を施文する土器が多い．

土器は一般に　焼成やゝ良好．色択は明るい黄褐色が多い．胎土には砂粒を混在し　わずかに繊維を含む．貝殻条痕文を　内面に施文しない土器にも　内面は化粧粘土をぬり　磨研する技法がとられている．

土器1－3は共通した作法で　やゝ多量の繊維を胎土に含み　器質は軟かく　内面は黄色を呈する．土器5は口唇内面を整形し　口縁は低い波状突起部をもつ．一条のやゝ太い綾絡縄文を装飾が　口縁の上部にめぐらされている．6の内面には貝殻条痕文がみられる．7は口唇に爪による押圧文が並ぶ．この土器はかなりの繊維と砂粒を胎土に含む．

土器9－14については　他の報文で　しばしば言及したことがあるが　これらの土器は　外反する口縁部上端に　押圧施文があり　文様帯の下限には　一条の太い粘土の貼付隆帯がある．この太目の隆帯を貼付けるために　土器の頸部には　器表と隆帯との間に　一条の縄をめぐらし隆帯が剝落した面に　炭化して消滅した縄の仮像が　空洞として残っている．15は11に　14は12に接着する．隆帯は9・10のように　口唇の施文と同一の文様を施文して　併せて貼付のため押圧手法をとっている．この場合　9－15のいずれにも　指頭による押圧技法※がとられていないことは　注意を要する点であろう．器内面の条痕文例として16～19を掲げた．25の内面にも　顕著な条痕がある．

以上すべての土器片に文様に　撚糸文がきわめて高い出現率を示すことは　注意すべき事実であろう．

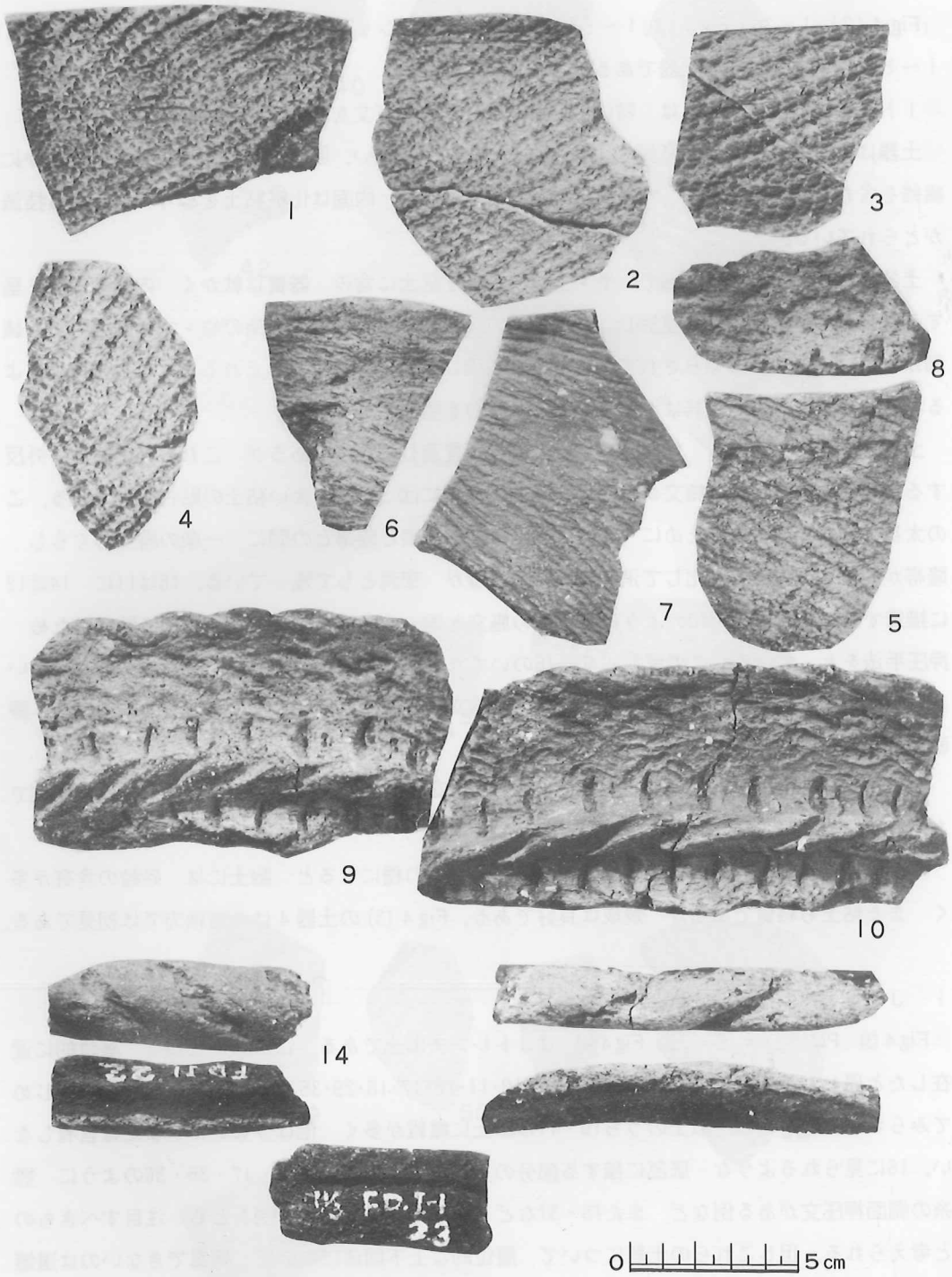
Fig 4 (3) 5は　Ｉトレンチ最下部の出土である．この種になると　胎土には　砂粒の含有が多く　また粘土も粗質であるが　焼成は良好である．Fig 4 (3) の土器4は　当地方では初見である．

i　Ｊトレンチ

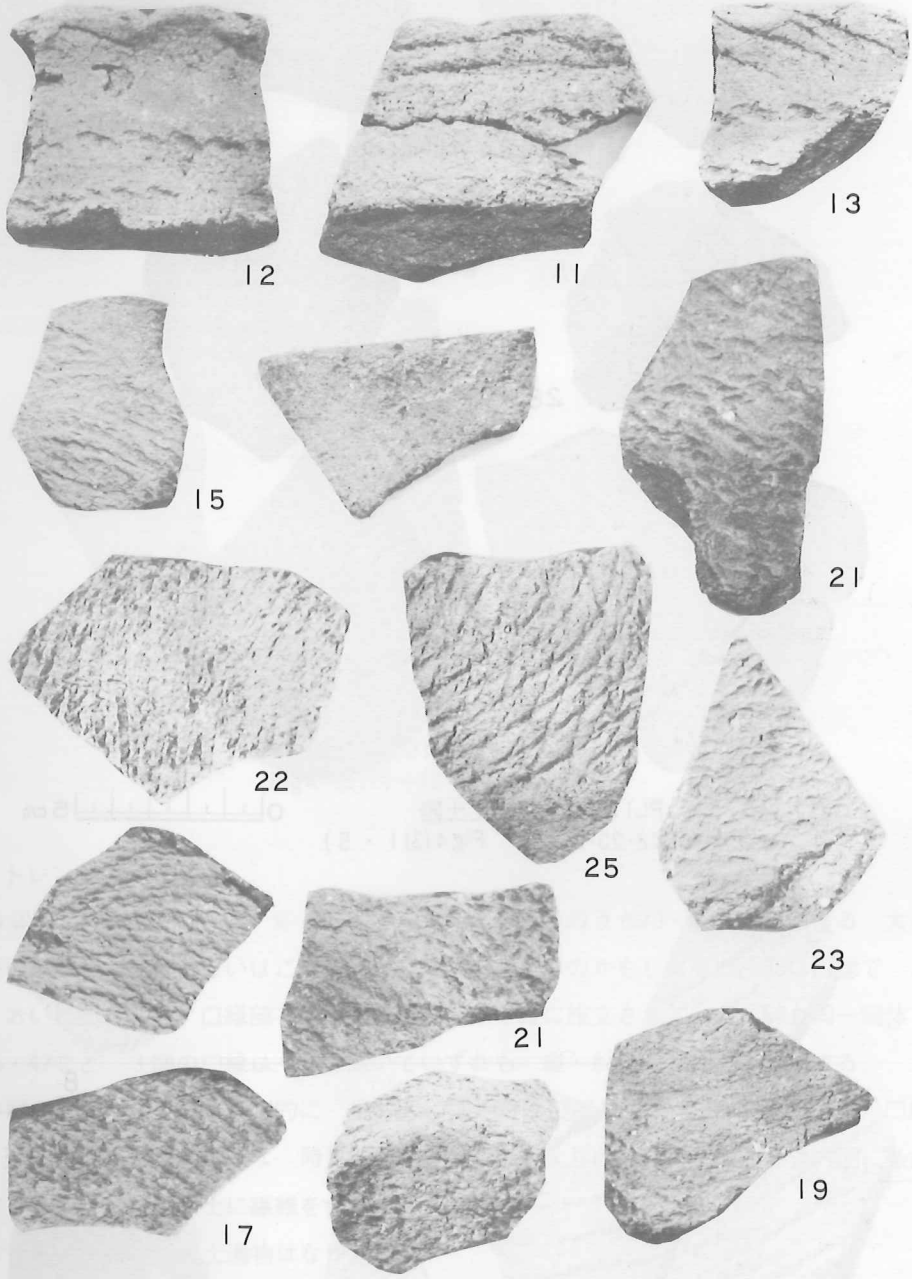
Fig 4 ⑶　PL 13・14　6～39　Fig 4 ⑷　はＪトレンチ出土である．これらの土器は　層位的に混在したと思われる1部を除いて　6・7・9・10・11・16・17・18・29・35・36などは　この遺跡ではじめてみられる土器である．以上のうち10・11は胎土に繊維が多く　他は少ないか　または含有しない．16に見られるような　底部に接する部分の文様を擦消してある例　17・35・36のように　撚糸の側面押圧文がある例など　また18・31など　間隔ある縄文のある例なども　注目すべきものと考えられる．但しこれらの土器について　層位的な上下関係について　確言できないのは遺憾である．

Fig 4 ⑷　1～26は手違いから写真撮影をしていないので　提示できないが　7の口縁には浅くはあるが　指頭押圧文がある．

※茂屋下岱遺跡でも　芋掘沢遺跡でも　指頭押圧文が盛行している．

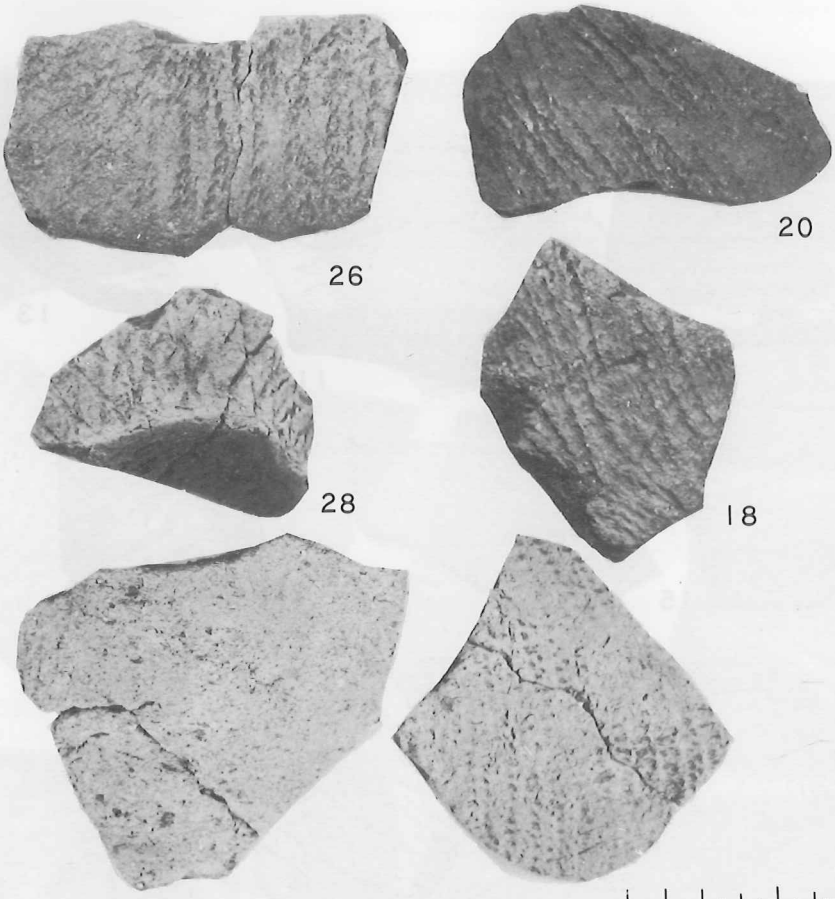


PL 9　Fd. IT出土土器
(Fig 4 (2) 1 ～14)



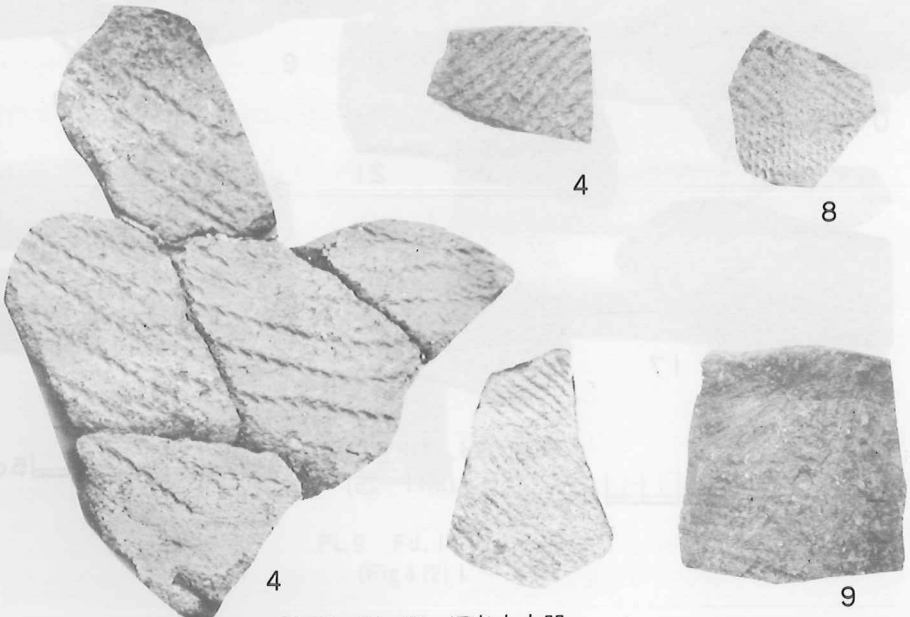
PL10 Fd. IT出土土器
(Fig 4 (2)11～25)

0 5cm



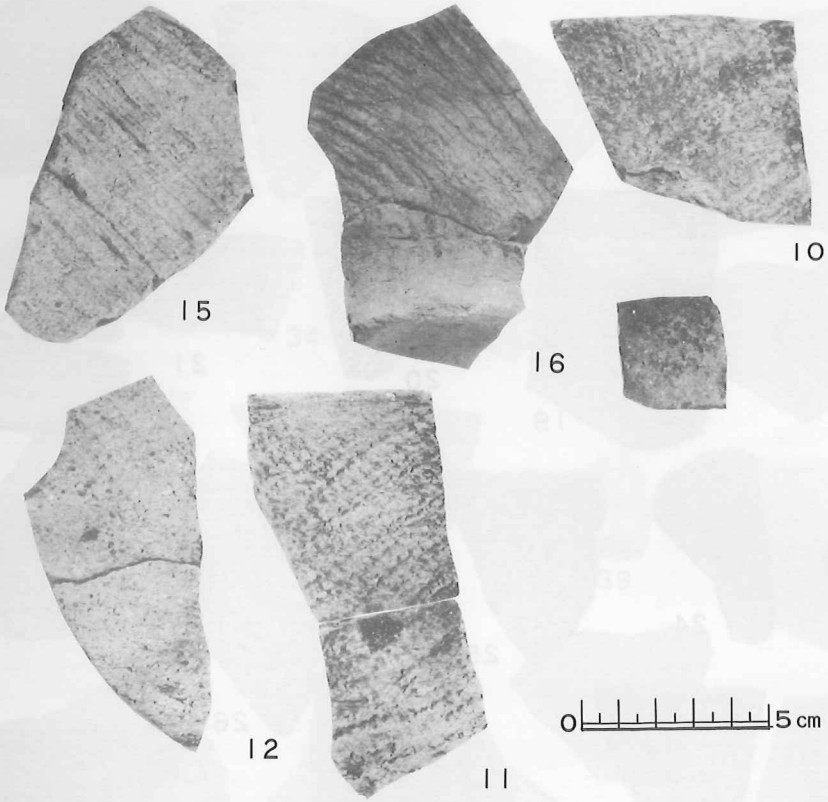
PL11 Fd. IT出土土器
(Fig 4 (2)18・20・26・28 Fig 4 (3) 1 ・ 5)

0 5 cm



PL12 Fd. IT. JT出土土器
(Fig 4 (3) 4 ・ 7 ～ 9)

0 5 cm



PL13　Fd. JT出土土器
(Fig4 (lb) 10～12・15・16)

j　Kトレンチ

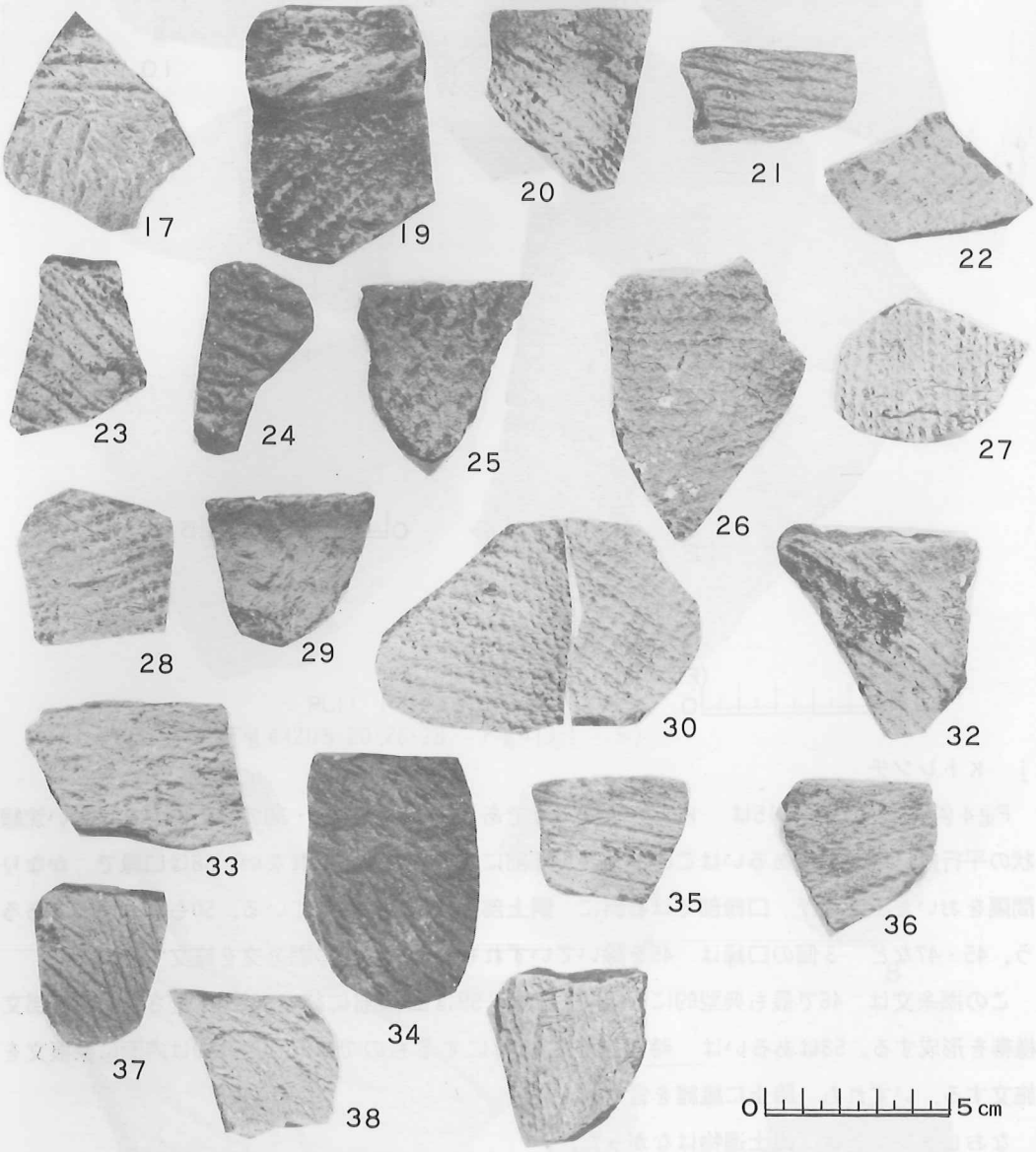
Fig4 (4) 27～55　PL15は　Kトレンチ出土である．このうち29・30の上部にある　太い沈線状の平行線は撚糸で　あるいはこの部分が　下部になるものかもしれない．38は口縁で　かなり間隔をおいた撚糸文が　口縁部では右斜に　胴上部で縦に施文されている．50も同一個体であろう．45・47など　3個の口縁は　45を除いていずれも　縦・斜走の撚糸文を施文する．

この撚糸文は　46で最も典型的に　規則正しい．59は口縁部に絡条体が施文され　口縁部文様帯を形成する．53はあるいは　時期を著しく異にするものであろうか．40は内面に条痕文を施文する．いずれも　胎土に繊維を含む．

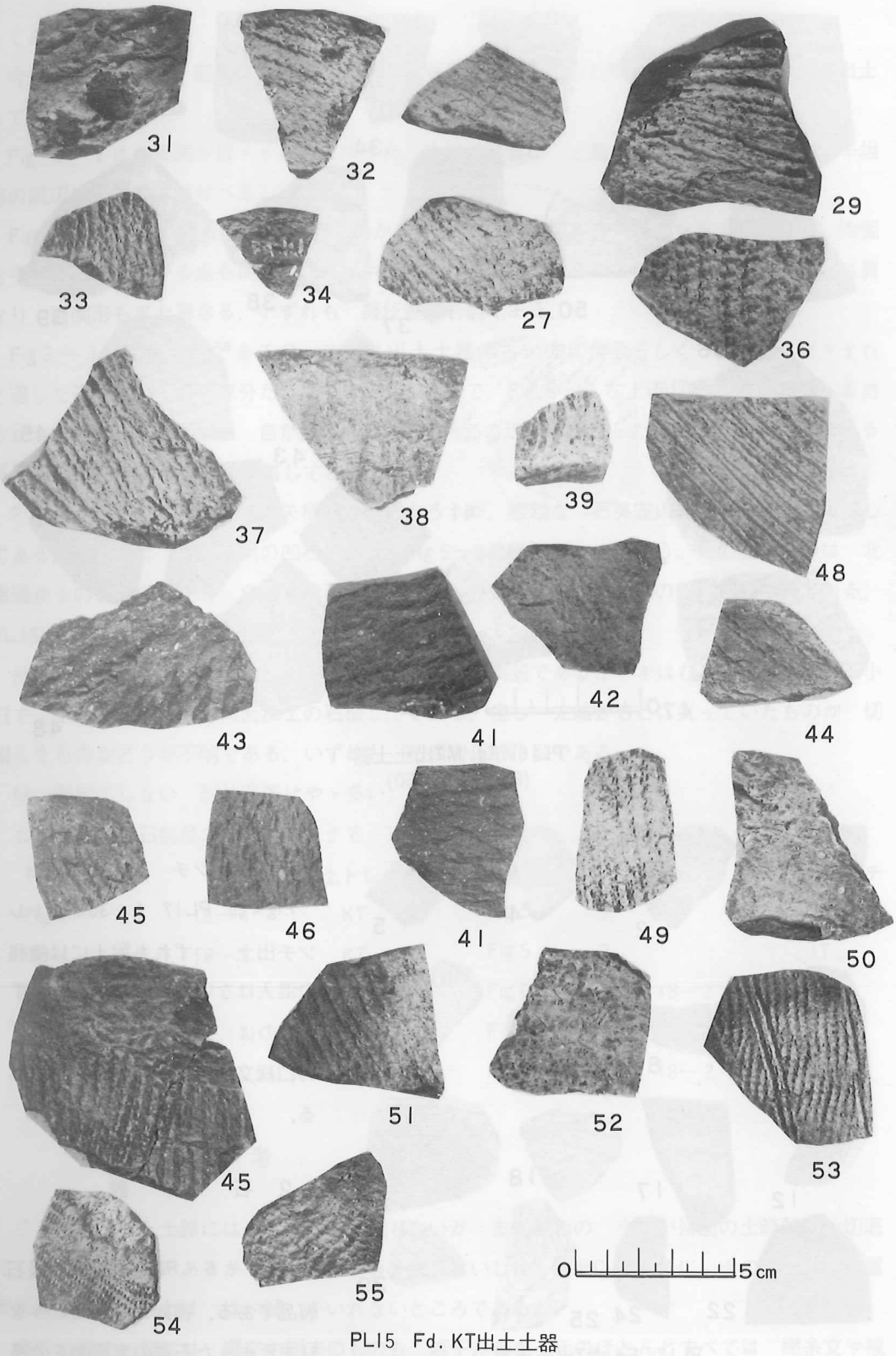
なおLトレンチは　出土遺物はなかった．

k　Mトレンチ

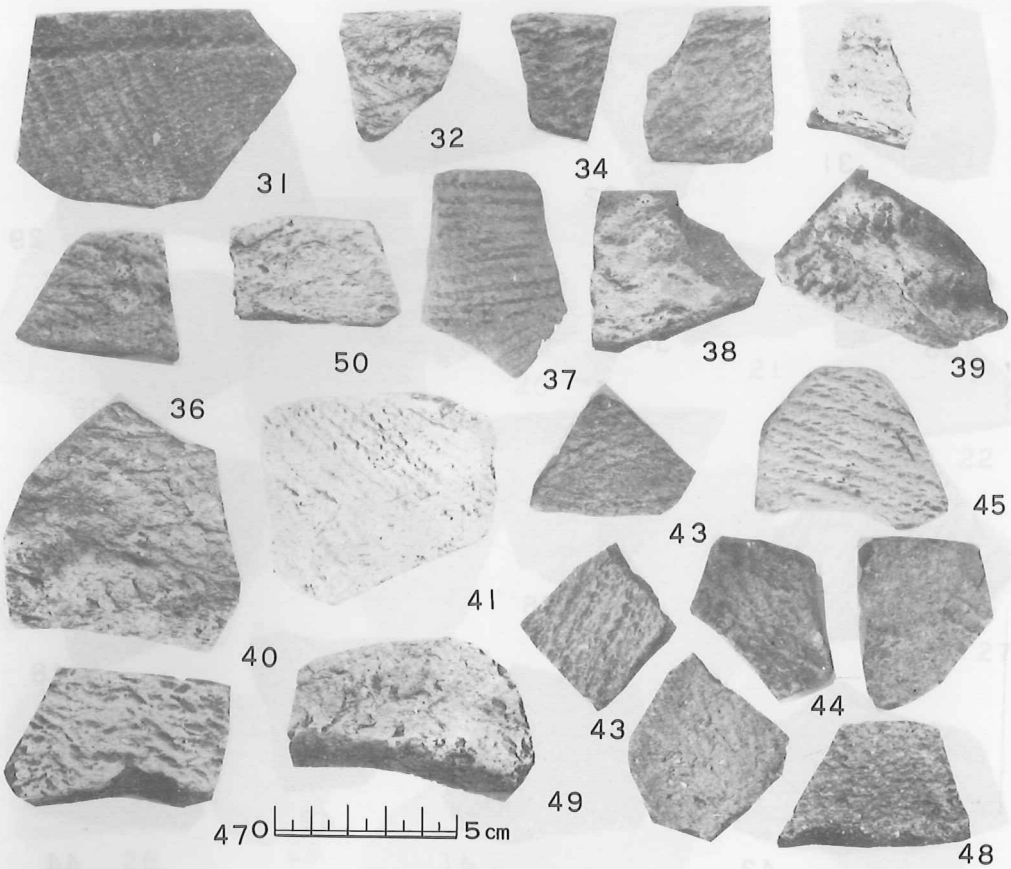
Fig4 (5) 31～50　PL16が　このトレンチの出土である．何れも　胎土に繊維を含み　軽い．31・43・45の内面には　条痕を施文する．31は口唇上端にも縄文があり　内面の条痕は縦横両走である．



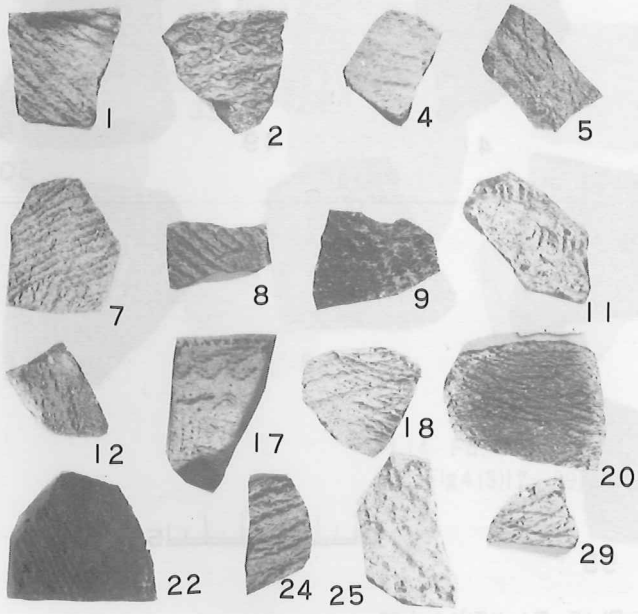
PL14 Fd. JT出土土器
(Fig 4 (3)17～39)



PL15 Fd. KT出土土器
(Fig 4 (4)27～55)



PL16　Fd. MT出土土器
(Fig 4 (5)31～50)



PL17　Fd. NT出土土器
(Fig 4 (5) 1 ～29)

1　Nトレンチ

Fig 4 (5)　PL17　1－30はAトレンチ出土　いずれも胎土には繊維の混入はない．内面に条痕を有するものは　2・3・17である．2の口縁文様帯は　竹管刺突文である．

2　石　　器

Fig 5・6　PL18は　石器及石製品である．福館からは先にかなりまとまった石器の実測図を公表

してある.

今発掘に当っては　磨製の石製品として　茂屋下岱でも出土した有孔岩板と　同じものが出土している.

Fig　5－2は　周囲がほゞ6角形に作られ　片面は平坦に　上面(?)は　穿孔した中央部平坦面の周辺を　斜めに磨りへらしている.

Fig 5－1は　これと用途の異なるものかもしれないが　周辺を多角形になるように擦り　両面を平坦に擦減している点も同じで　たゞ中央の穿孔が　両面からの工作であることが　2とは異なり　断面形もまた異なる. いずれも　凝灰質砂岩製である.

Fig 5－3は磨製石斧であるが　これは出土土器の古い方に伴うらしく　特色は　ほゞそれと適した河原石の　必要部分だけを磨減する工作法で　Fig 5－3左上面図の　右側面は　なめらかな自然面で　裏面にも　自然面を残す. 先にもこの地から出土した　このような技法による扁平な　小型半磨製石斧を報告してある.

Fig 6－1は 砥石の一種で　矢柄研磨器であろうか. 粗粒な　石英安山岩(熔岩)河礫を整形してある. 同図2は　両面使用の凹石である. Fig 6－3は砥石(?)であろう. この種のものは　北海道からの報告が目立ち　白滝の旧石器中からも　外面観が類似したものが　報告されている. PL18に　石斧を除くこれらを掲げた.

他は打製石器で　Fig5の4～7である. 4・5は尖頭器であるが　4はむしろ6に近似の石小刀で　7は有柄の見事な両面加工の石槍(?)である. 但し　先端がもとは尖っていたものか　切損したものかどうか不明である. いずれも　粘板岩(硅質)製である.

他に再加工しない　剝片石器はやゝ多い.

なお各石器・石製品の出土トレンチを　次に掲げる.

Fig	No.	PL	出土トレンチ	Fig	No.	PL	出土トレンチ
Fig 5	1	18－4	KT	Fig 5	6		KT
Fig 5	2	18－5	KT	Fig 5	7		JT
Fig 5	3		JT	Fig 6	1	18－3	表採
Fig 5	4		JT	Fig 6	2	18－1	CT
Fig 5	5		KT	Fig 6	3	18－2	KT

Ⅳ　考　　察

ここに提示した土器には　実型品は一個もないが　まず橙色の　うすい滑面の土師器は糸切底で　しばしば内黒であるが　これらが小坂X式　ないしは　後北C_2式土器に　その編年上の位置が近接していることは　ほゞ疑いをいれないところであろう.

他の土器の一部には　縄文中期末のものも　若干みるが　そのほとんどすべては　撚糸文や複

雑な縄文の盛行する　いわゆる繊維土器の仲間である．これらの土器の編年位置を　ここでは層位的に表現することができないが　胎土　施文　推定される器形から「茂屋下岱式土器群」[1]に併行するものであり　その一部は　円筒下層ａ式や　その直前の深郷田式[2]に併行すると考えられる．また津軽半島の浮橋式[3]もこれに相当するものであると推定される．

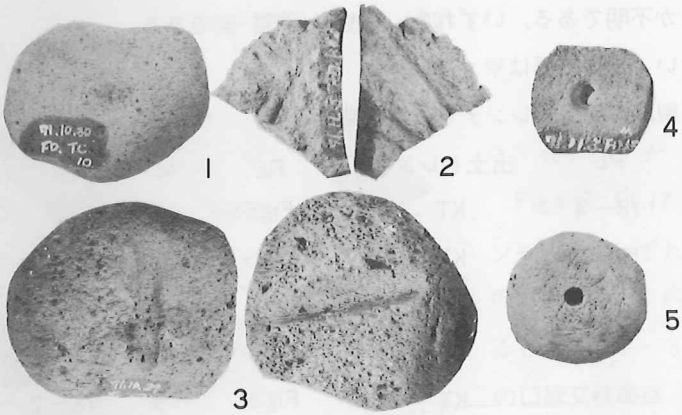
これらの出土した地区の南部では　深郷田式などより古い　姉沼式に共伴するものに類似する土器も出土している．[4]

またいわゆる芦野第２群[5]に類するものもあるようであるが　これらは既に　「茂屋下岱式土器群」の一部に包含されるものも多い．

あるものは　先に大館市教委主催で発掘調査した　芋掘沢の最下層位の土器群に併行するものである．

茂屋下岱式に伴出する　特長ある石器としては　有孔の板状磨製の石製品がある．また矢柄研磨器の一種と思われる石器の発見も　今般がはじめてである．河原石の原面を残す磨製石斧も有力な特長である．

茂屋下岱式や浮橋式　また深郷田式　芦野第２類には　各種の未解明の問題が伴うが　これら　いわゆる円筒下層ａ式　ないしｂ式に先行する縄文前期後半の土器群は　おそらく　文化複合の所産で　地点によっては簡単には分類できない　地方色〔型式差〕をかなり濃厚に示しているものと考えられる．われわれは更に　良好な遺跡に恵まれることを　希求して止まない．



PL18　石器・石製品

(1)　奥山潤編・大館鳳鳴高校社会部『茂屋下岱式土器群』　1971
(2)　佐藤達夫　渡辺兼庸・深郷田遺跡発掘概報　「平内町史」1965
(3)　村越潔・浮橋貝塚「岩木山」　PP 403～409
(4)　奥山潤・前掲・福館遺跡
(5)　名久井文明・青森県芦野遺跡の土器群について　「考古学雑誌」57巻２号　昭46

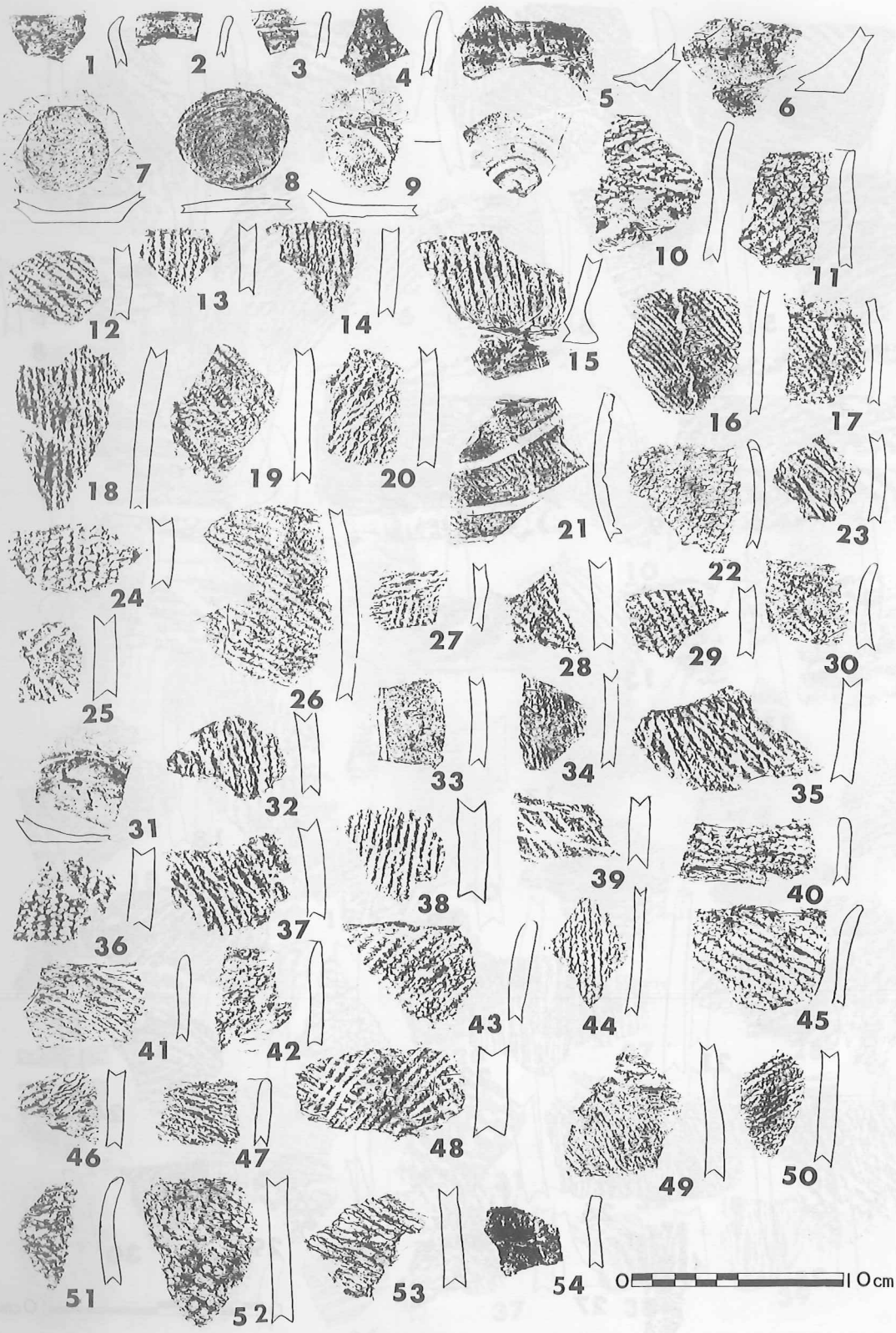


Fig 4 (Ib)　A－Hトレンチ出土土器拓影
1～9(Aトレンチ)10～20(Bトレンチ)21～30・54(Cトレンチ)31～37(Dトレンチ)
40～44（Fトレンチ）46～48（Gトレンチ）49～53（Hトレンチ）

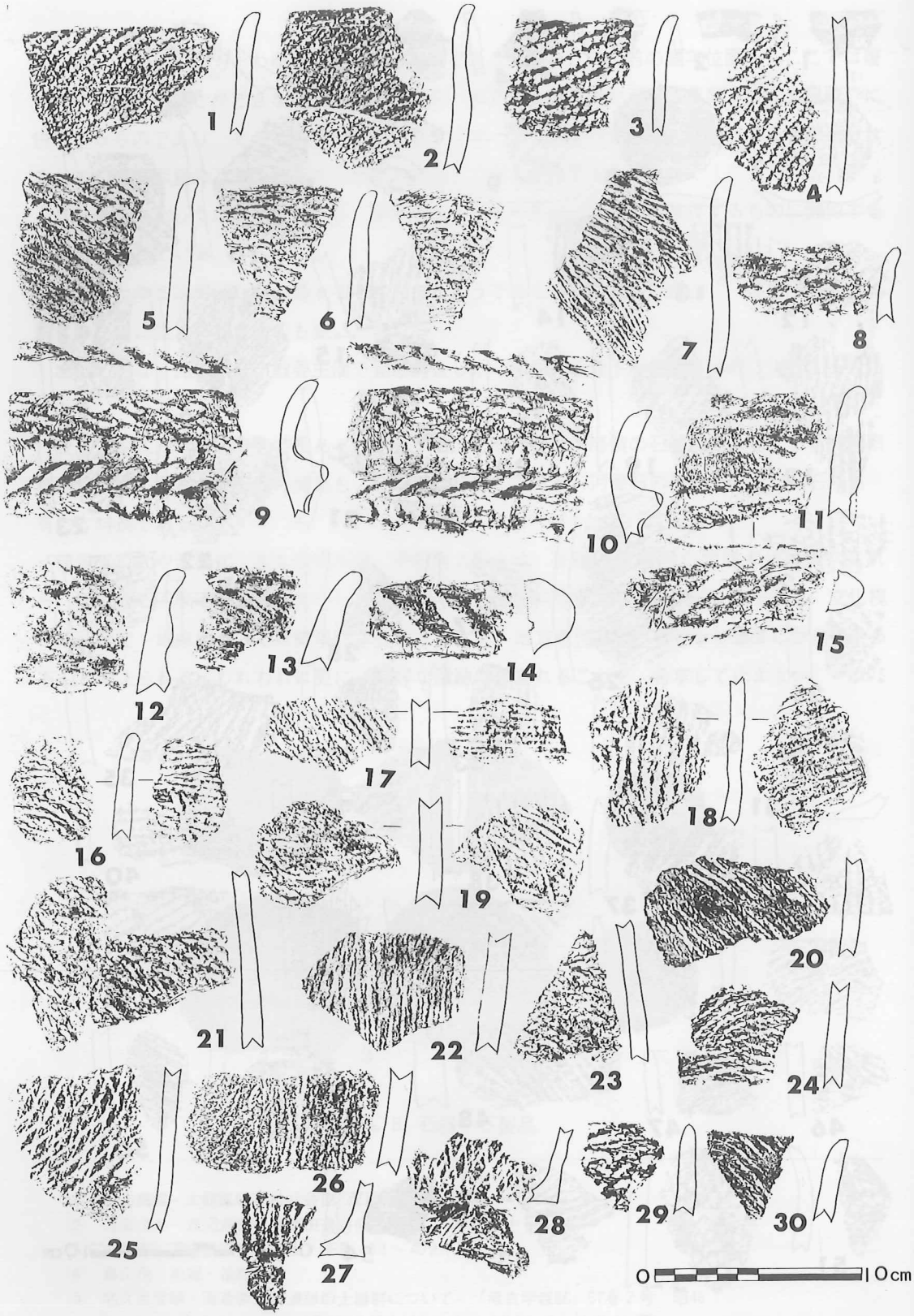


Fig 4 (2)　Ⅰトレンチ出土土器拓影

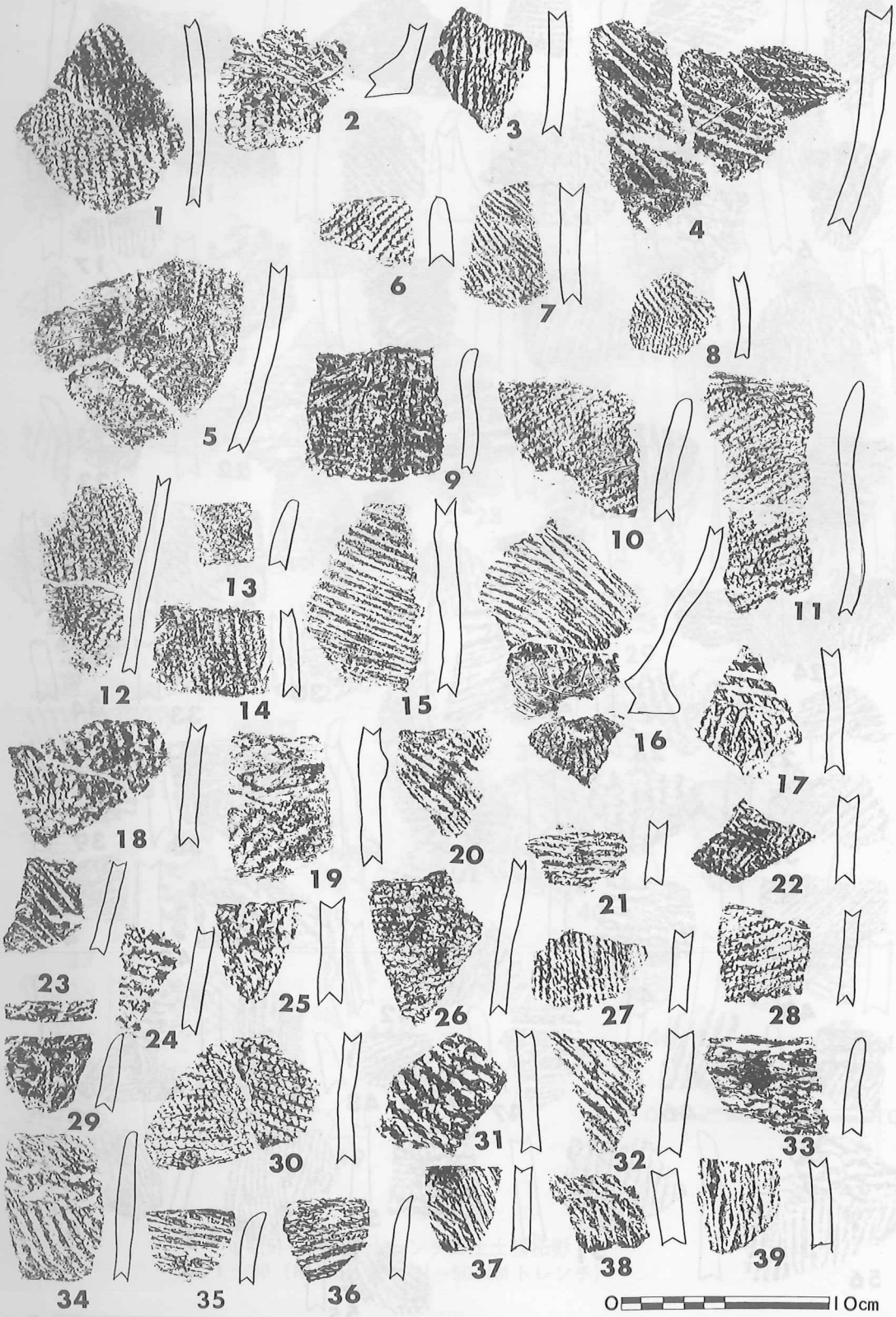


Fig 4 (3) I・Jトレンチ) 出土土器拓影 1～5(Iトレンチ) 6～39 (Jトレンチ)

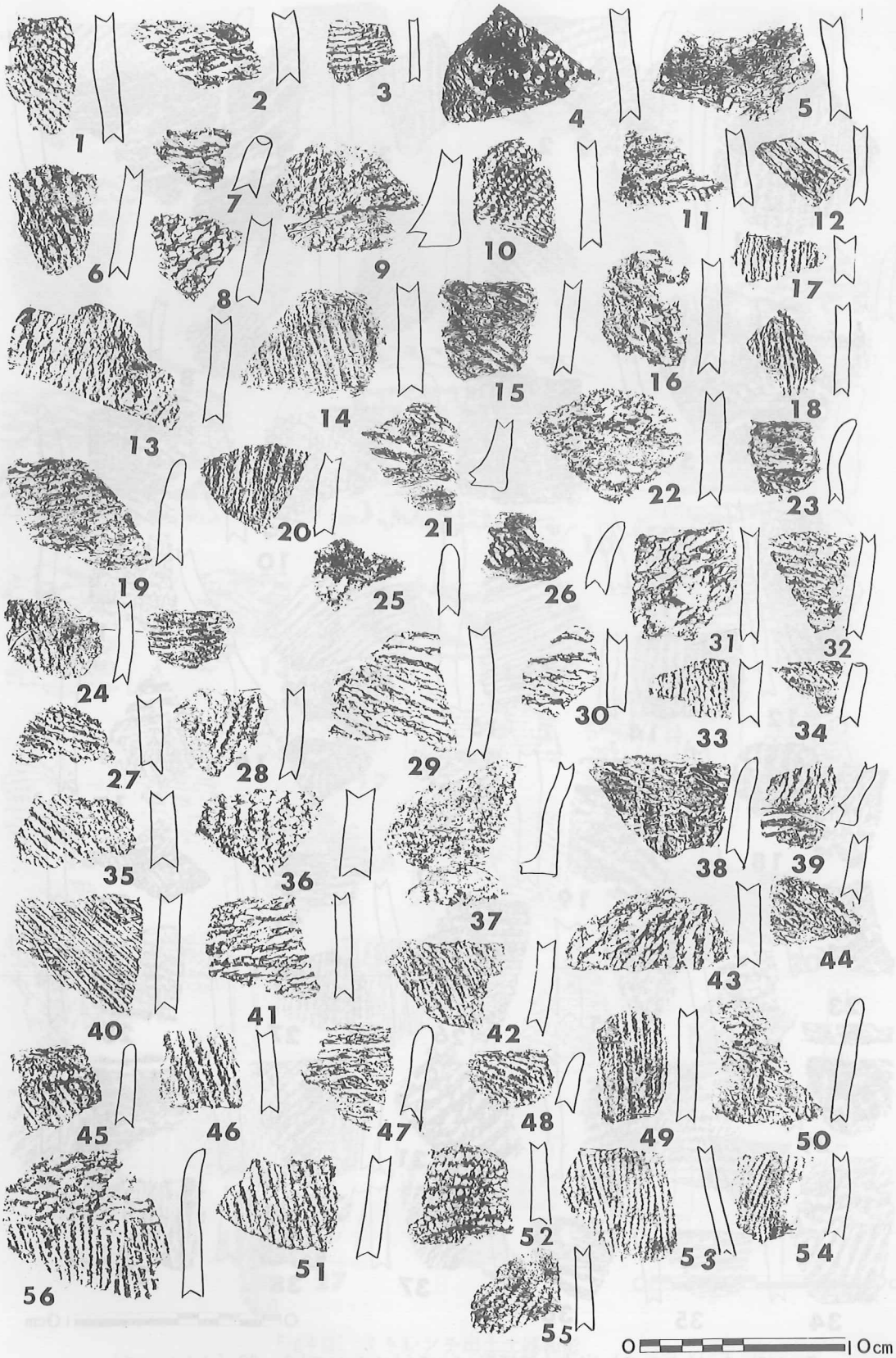


Fig 4 (4)　J・K トレンチ出土土器拓影
1～26（J トレンチ）　27～55（K トレンチ）

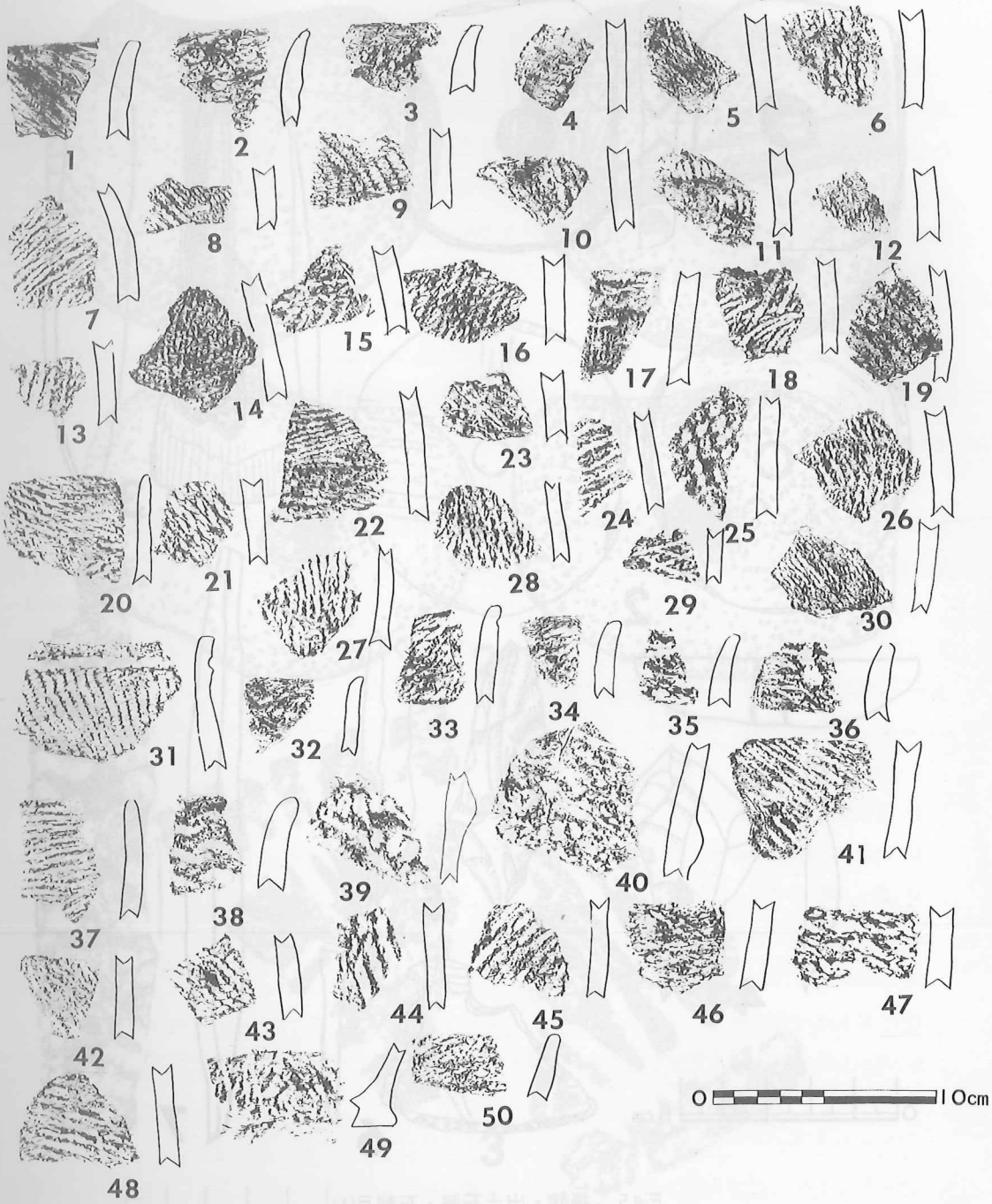


Fig4(5)　M・Nトレンチ出土土器拓影
1～30（Nトレンチ）31～50（Mトレンチ）

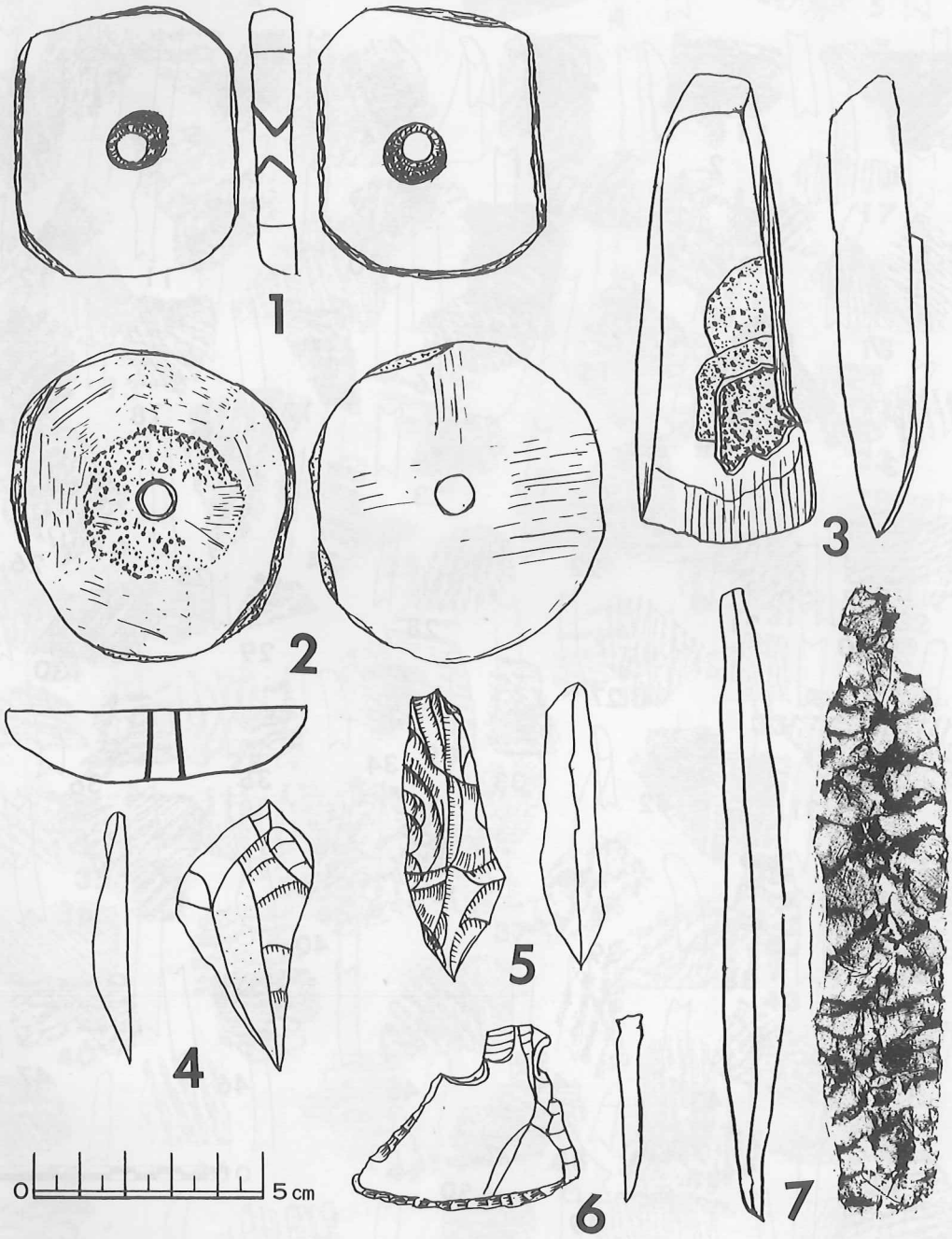


Fig 5　福館・出土石器・石製品(1)

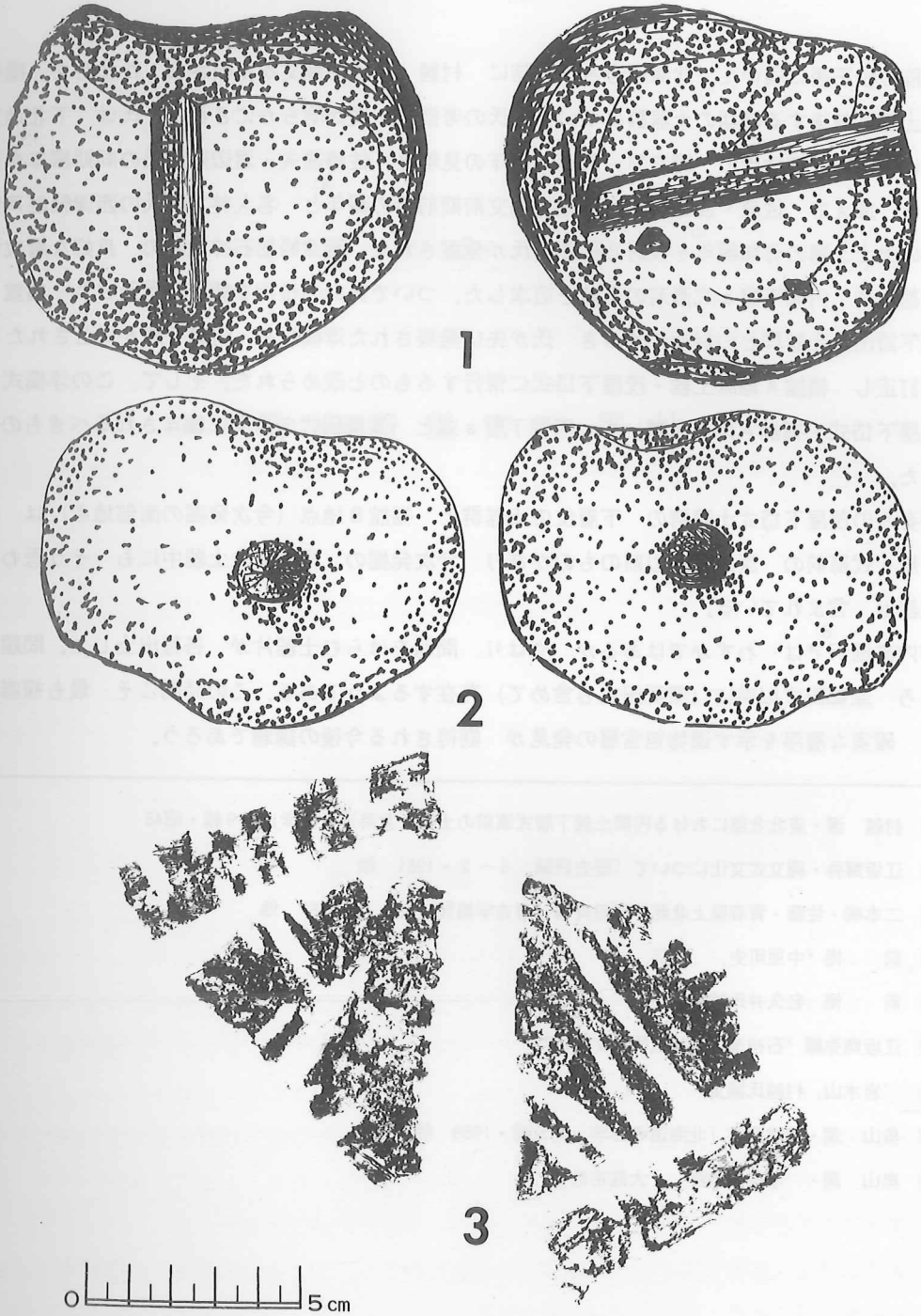


Fig 6　福館出土石器(2)

補　　遺

本稿の校正後に届いた『北海道考古学』誌に　村越　潔氏の論文[1]が掲載され　たまたま　橋桁野の土器と前後する時期の土器群について　氏の考察の一端が明らかにされた．氏は　下北地方における　江坂輝弥氏の　縄文早～前期の編年の見解[2]と　佐藤達夫・渡辺兼庸氏の同期編年[3]を比較され　加えて　佐藤・渡辺氏の上北地方縄文前期前半の編年[4]と　名久井文明氏の西津軽郡芦野遺跡の出土土器の分類編年[5]を検討し　更に氏が発掘された　西津軽郡石神遺跡[6]の　良好な層位資料に基いて　円筒下層a式直前の土器を追求した．ついで奥山の稚拙な報告に言及され　福舘～茂屋下岱出土土器群との対比に基づき　氏が先に発表された浮橋式を　円筒下層b式とされたことを[7]訂正し　福舘A地点土器・茂屋下岱式に併行するものと改められた．そして　この浮橋式（茂屋下岱式・福舘A地点土器）を　円筒下層a式と　深郷田式の中間に編年されるべきものとされた．

筆者らの茂屋下岱式土器群の　下層位の土器群と　福舘B地点（今次発掘の南部地点）は　円筒下層a式直前の　深郷田式以前のものがあり　今次発掘の　福舘出土土器中にも　そう思われる土器が　含まれている．

市内芋掘沢[8]では　わずかではあるが　やはり　問題をはらむ土器片が　各種出土した．問題はむしろ　深郷田式以前に（深郷田式も含めて）存在するようである．この時期こそ　最も複雑であり　確実な層序を示す遺物包含層の発見が　期待される今後の課題であろう．

---

(1) 村越　潔・東北北部における円筒土器下層式直前の土器「北海道考古学」第9輯・昭48

(2) 江坂輝弥・縄文式文化について「歴史評論」5－2・1951　他

(3) 二本柳・佐藤・青森県上北郡早稲田貝塚「考古学雑誌」43－2・1957　他

(4) 前　　掲『中里町史』　1965

(5) 前　　掲　名久井氏論文　1971

(6) 江坂輝弥編『石神遺跡』村越氏論文　1970

(7) 『岩木山』村越氏論文

(8) 奥山　潤・福舘遺跡「北海道考古学」第5輯・1969　他

(9) 奥山　潤・『芋掘沢遺跡』　大館市教委

第　2　部

橋桁野竪穴住居址

Ⅰ　緒　　文

福館遺跡(遺物包含地)の再調査開始ののち　われわれは　ここと道路をへだてた北東側の　土器散布地に　トレンチを入れた．大館桂高校社会部考古学班により　ほゞ東西に掘りさげたトレンチの地表下　約1.5ｍ余に　運よく　竪穴住居址の掘りさがり部分が出現し　ここに竪穴住居の発掘となったのである．しかし北側は　発掘を許されぬ畑であり　西は道路に直接し　しかも深さ1.5ｍの黒土層の排除は困難をきわめ　ある程度竪穴床面の拡張を確かめた上で　タイヤローダーやバンドドーザーの出動を依頼　担当者の立合指揮のもとに　掘削除土の作業を行った．然るに　はじめの予想とは異なり　予期しない南北の長方プランをもつ竪穴が出現する結果となった．拡張につゞく拡張と　意に満たぬ作業をすゝめ　周囲が一帯に及ぶ　大竪穴群の存在を認め　また土地所有者諸氏の　寛大な理解にも拘わらず　作業を完成するに至らなかった．ここにまことに恥ずかしながら　発掘結果のありのまゝを記録し　作業の開始より　中止までの報告とする．

なお　その年の冬は　雪が少なく　3月中から調査を開始　大館桂・仝鳳鳴高社会部　同OBの富沢正雄君の援助を受けた．土木機械の使用を快諾された　泉　竹之助氏はじめ　この諸彦及び土地所有者の方々に心から深く感謝申し上げるものである．

なお　遺跡所在地の地形　地質等については　第1部のその章と同じであるから　これを省略する．また地番は橋桁野12番地である．

Ⅱ　発　掘　調　査

先述のように　あとでA竪穴と呼称した竪穴の壁を発見した　東西方向のトレンチに直交するように　その東端から南北方向のトレンチを設定した．それにより　この橋桁野12番地のほとんど全域に　竪穴群が存在することを知ったが　まず　その北東側Aトレンチの東端付近から　拡張を開始　のちB住居址とした遺構が出現した．おそらくは竪穴と考えられるものの　Bトレンチ南端の黄色土（シラス上面）の深度その他から　果して竪穴の掘下げ壁を発見することができるか　またそれが存在するかどうか疑わしい点があり　そのためと　A竪穴の拡張のため　多くの時間と労力をとられ　B住居址の全域を明らかにすることができなかった．

いまここでは　拡張し得ただけの部分について報告する．なおこの住居址に　信頼すべき遺物は　円筒形土器の底部1個だけであるが　諸種の状況から　第1部福館遺跡の出土土器に近接した時期のものと考えられる．

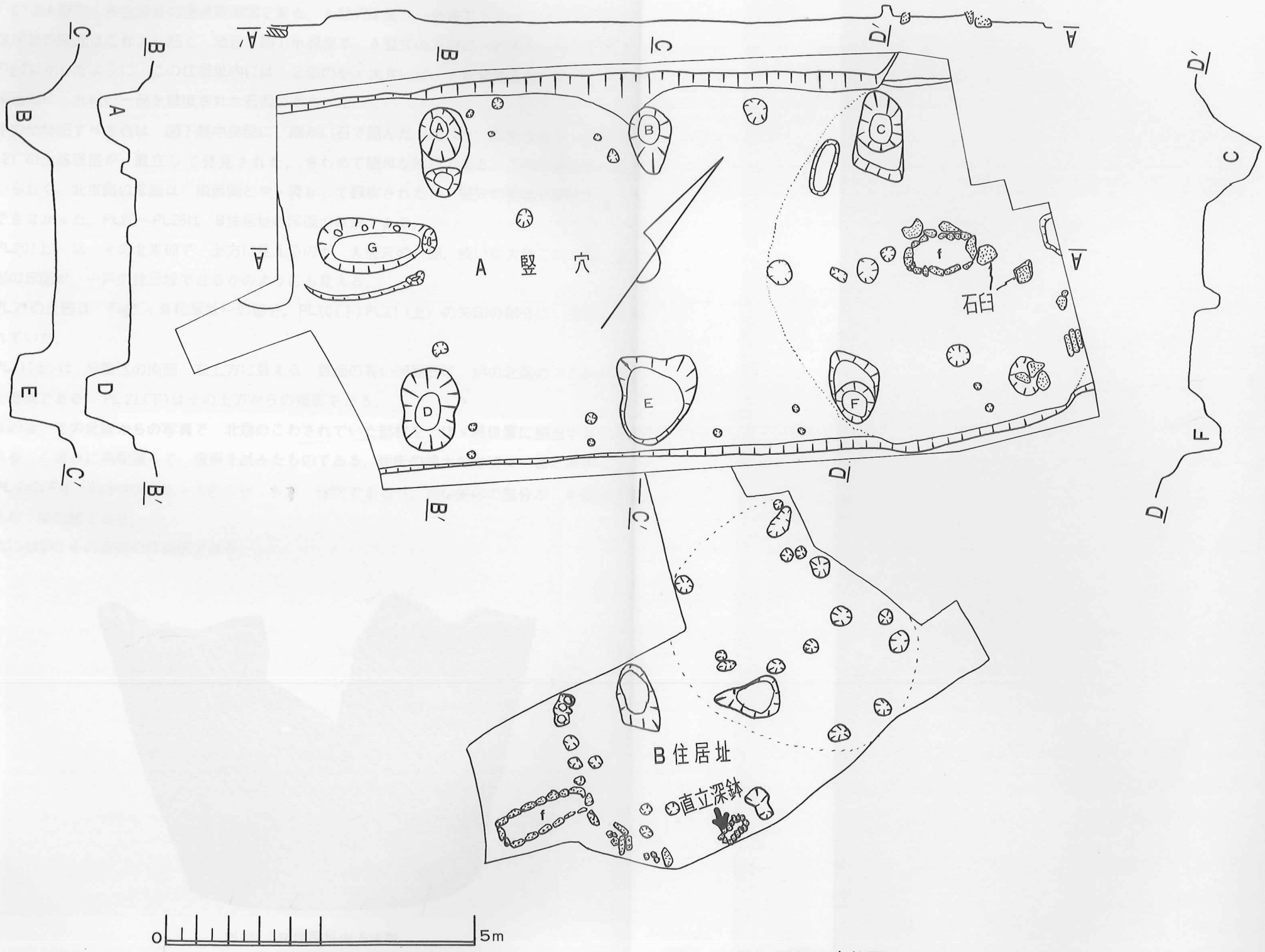


Fig 7　橋桁野竪穴全体図

1　B住居址

Fig 7はA竪穴・B住居址の連続実測図である．A竪穴床面が　地表下1.5 mであるのに反しB住居址の床面はこれより高く　地表下約1 m程度で　A竪穴の方向に　わずかに傾斜する．

Fig 7に示したように　この住居址内には　2個のやゝ大きいピットが発見されたほか　トレンチ南西側に　北縁の一部を破壊された石囲炉があった．

その他特記すべき点は　図下端中央部に　細かい石で囲んだ（並べた）部分があり　その上にPL21 の土器底部が　直立して発見された．きわめて簡単な施設である．この住居面は一期でないらしく　北東側の床面は　南西側とやゝ異なって観察されたが　竪穴の重複を確認することはできなかった．PL20～PL25は　B住居址の床面の状況である．

PL20(上)　は　その北東部で　上方に見えるのが　A竪穴の一部．或いは大体この一画　ほゞ円形の床面が　一戸の住居址であるかのようにも見える．

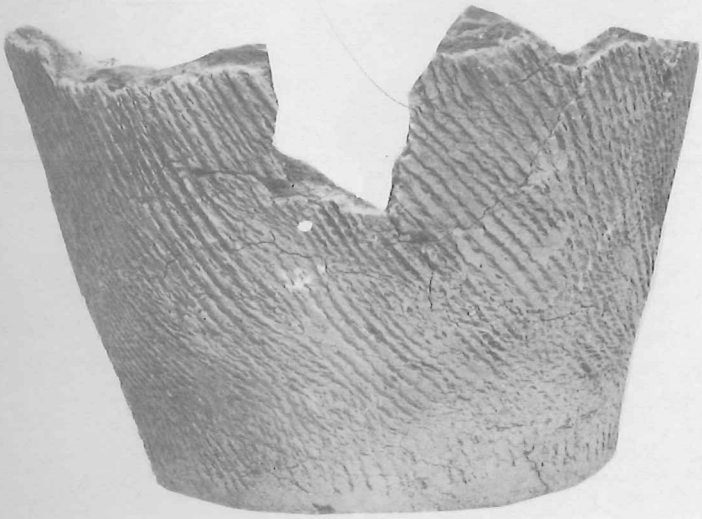
PL21の土器は　Fig7・B住居址←の部分．PL20(下)PL21(上)の矢印の部分に　直立しておかれていた．

PL21(上)は　発掘区の南部　左上方に見える　数個の長い河原石は　炉の北端の　こわされていた部材である．PL 21(下)はその上方からの撮影である．

PL23は　その北側からの写真で　北端のこわされていた部材を　ほゞ原位置に相当すると考えられる　くぼみに再配置して　復原を試みたものである．炉床の焼土の堆積は　甚だ薄かった．

PL 24はFig 7の中央部　やゝ大形のピットで　柱穴であろう．白い矢印の部分が　A竪穴に落ち込む　壁の線である．

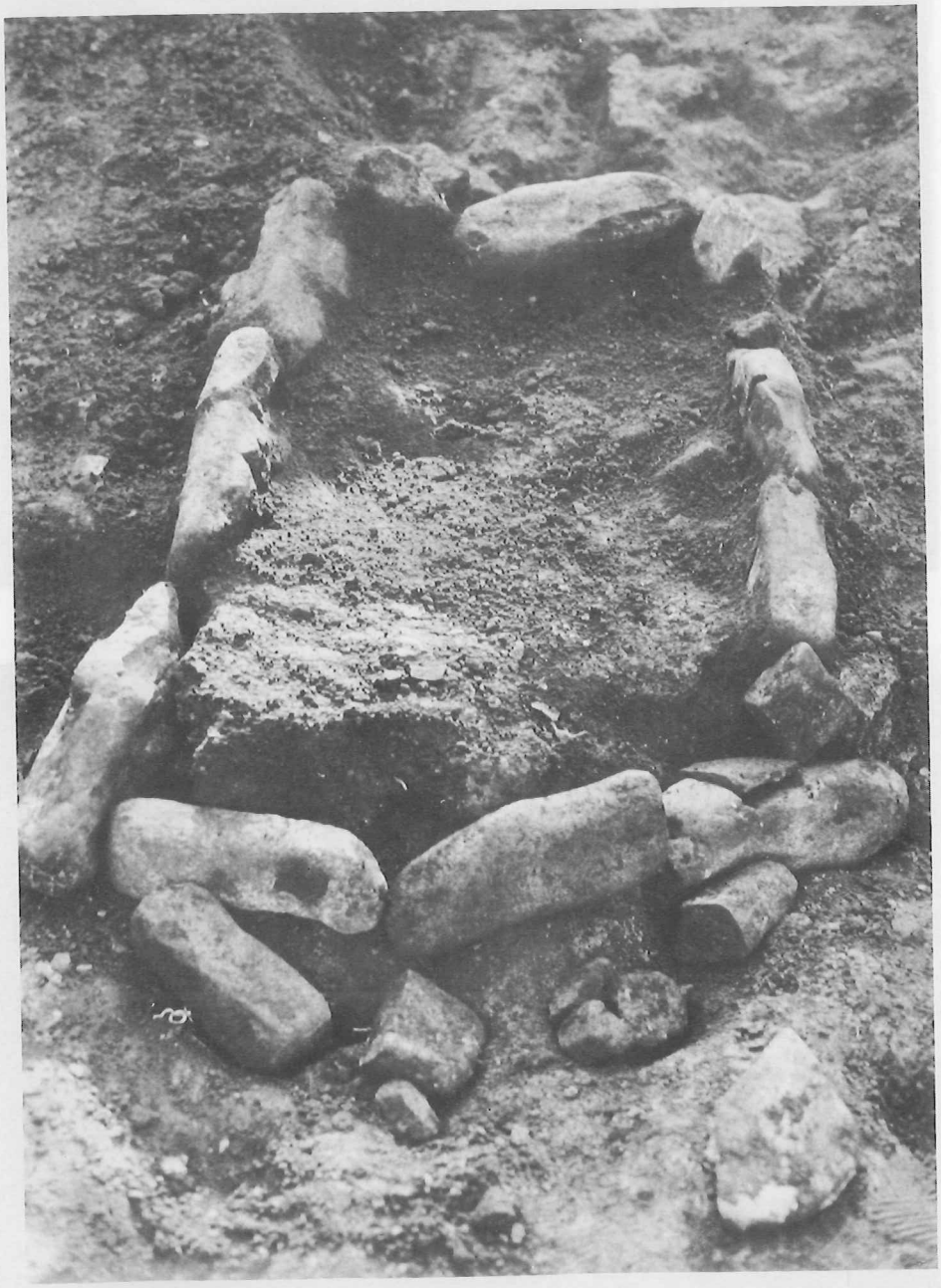
PL25は炉とその東側の作業区である．



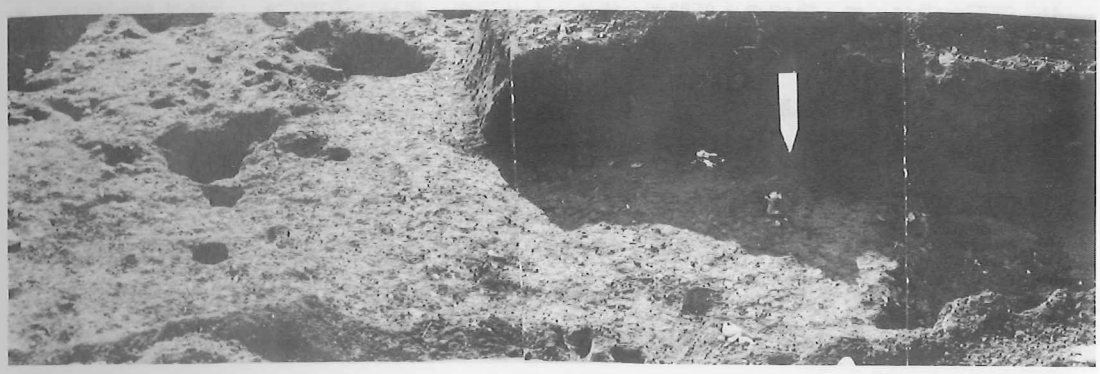
PL 21　B住居址出土土器

PL20　B住居址床面
(上) 北　隅
(下) 石囲の中央に土器が直立してあった.

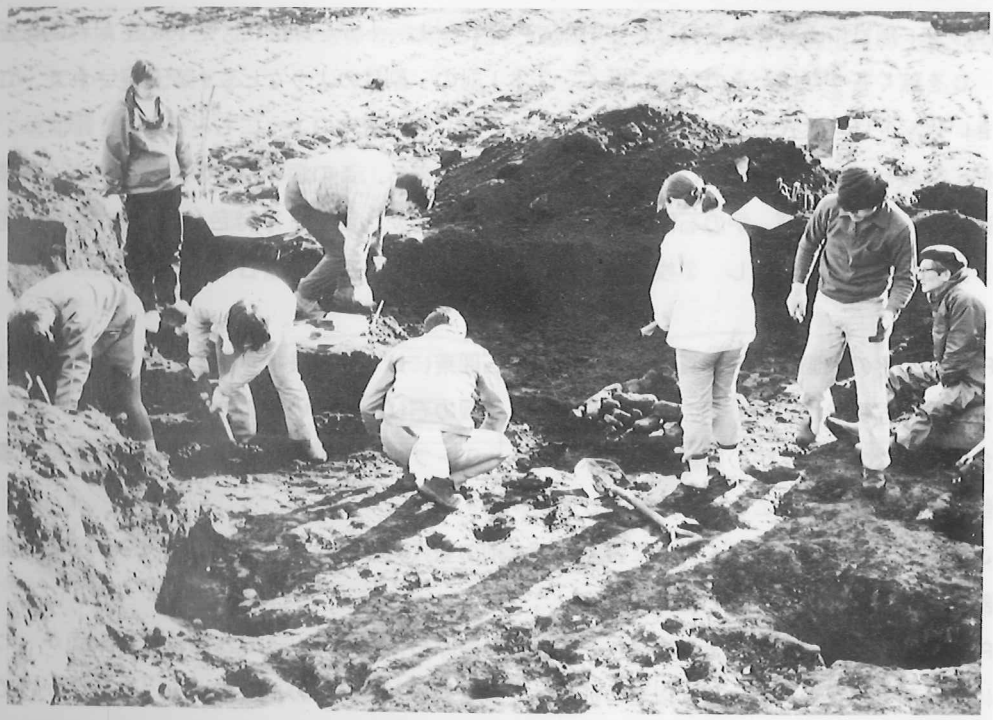
PL 21（上） B住居址南部床面
（下） 仝南端出現の炉の一部



PL23　B住居址炉跡（手前を復原）



PL24　左側Ｂ住居址
右白矢印より右がＡ竪穴掘下り



PL25　Ｂ住居址南端部の床面と発掘作業

2　A竪穴住居址

A竪穴の発見は　トレンチによる　西側中央壁面の出現にはじまるが　床面をトレンチ内で確認中　先に記載した　大湯浮石層が切れている個所があり　直径30cmぐらいの円型のピットとなり，浮石と混じって　Fig8の土師器が　伏さった状況で　単独に出現した．この土器以外に　A竪穴・B住居址ともに　土師器は1片も出土していない．この土師器の出土状況は　何とも判断しかねる．この大湯浮石層については　既にPL1に見られるとおりである．

Fig7　PL26～33は　A竪穴の全体　および部分である．A竪穴は　B住居址を切込んで　その床面はB住居址より　約30cmほど低い．

A竪穴は　ほゞ北東－南西の長方形を示すが　発掘区内の竪穴中央幅は　約11m余を測る．しかし　この竪穴の発掘範囲の　北東約3分の1は　壁の両側が外方に拡がることが知られ　この部分をつないだ　円形ないし長円形の範囲が　1個の竪穴であると推定される．

但し　この部分より西南の　床面との間に　切込みの関係を示す段はない．またこの竪穴は発掘区の南西端で　なお竪穴の壁は出現せず　この部分が　中央部とやゝ異なった床面を示すがやはり別個の竪穴を区別する　切込みの段はなく　全般的に平坦である．

Fig7に　仮りにA～Fと名付けた　6個のやゝ大きいピットが　床面に　きわめて対称的に配列し　Cを除く各々には　その外縁に近く　2本1対の　副柱のようなピットが発見された．この大きいピットは　柱穴であろうが　Eピットは　むしろ貯蔵穴のようにもみられた．

他に施設としては　北東側に発見された　石囲炉がある．この炉の附近の床面は　よく貼床が保存され　青味を帯び　炉の石囲の保存も良好であったが　目立った特色は南北に長い石囲炉の　西側長辺の縁石に接し　2枚のやゝ円形と長円形の　平らな河原石が　竝んでおかれていたことである．

PL29は　その南側からの写真であるが　炉の石囲東には　やゝ袋状を呈するピットが掘られていた．また写真で炉の右上隅の上方に見える　2個の石は　大きい石皿の割れたもので　2個は接合する．このように炉の周域に　袋状ピット　テーブル状の平石　石臼などの　いわば炊事用の設備が残されていたことは　注意をひいた．

この炉の左右で　壁はやゝ外方に張り出し　別の竪穴の存在を示している．PL26・28の左側下端部に　その一部が見えている．

PL30の右上方　床面と黒土の境に　2個の長い河原石が重なり　その左側には　床面が　わずかに高い部分が見られる．これ以上の拡張はできなかったが　このあたりから　右方にかけてFig12～15〔PL38下・39〕の各土器が　発見されたのである．

PL26・27は　A竪穴の発掘し得た限りの全床面であるが　PL26の右上方の壁にそい　2個のピットのほゞ中央をつなぐ直線状の　何らかの痕跡が見え　上端中央部には　小石の多い一地区が見られる．PL27の色調で　A・Dピットと　B・Eピットの間に　他の竪穴の床面が重なるように

みえる．Fig7にも現われているように　A・Dピットと　B・Eピットの両方の側から　2重の床面が存在するように見える．

PL26の上方中央と　PL27の右端中央には　やゝ高い面があり　このあたり一帯は　貼床が二重になっていた．

この西域の施設としては　Fig 7のG　PL 26・27の右中央より少し下方　PL 31のようなくぼみがあり　小石と粘土が充満していたが　このくぼみの周辺には　小さい柱跡とみられる　ピットが4～5本あり　特別の一画をなしていた．なお　PL 32・33も床面の状況である．

A竪穴は　南端の壁面を明らかにせず　終了したが　おそらく　A・B・D・Eピットの中間あたりを中心として　南西方に　同程度の床面の拡がりをもつものと推定される．

南半区の遺物は　主としてEピットの周辺に発見されたもので　Fig9～11　PL34～37がこれである．出土遺物は　土器のほかは　河原石石器に属するものが多かったが　完形の打製石器の出土はなかった．

3　出　土　遺　物

土　　器

土器は　A竪穴中央部　南東寄りから出土した土器〔Fig 9～11〕と北東側出土の土器〔Fig 12～15〕にわけて記載する．

a　土師器〔Fig8〕

口径12cm×11cmのやゝ長円形を示し　高さ約5cm　底径3.5cm　手こねりで　底はヘラ起しである．黄灰色で　やゝ厚手．焼成もよくない．

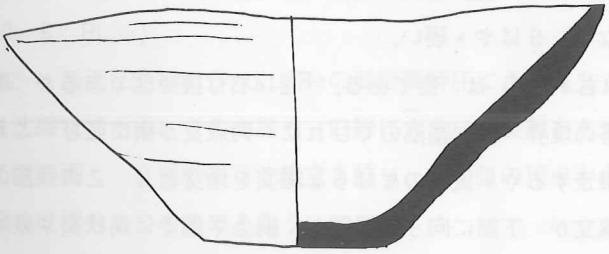


Fig 8　A竪穴上層出土土師器

b　縄文土器〔Fig 9 ～11　PL34～39〕

第1a類土器〔Fig9－1・3・6　PL34〕

口縁部aは磨消　縄文は細かく横走の傾向があり　口縁部以下の縄文の地文に　釣針形の2重沈線による曲線文　ないし円文(?)を画き　この沈線文間の口縁直下には水平に　沈線文の中央部には縦位に　竹管による刺突文を　一定の間隔で飾っている.

第1b類土器〔Fig9－4・5・8　PL34〕

第1a類と似たモチーフの文様構成であるが　口縁部の幅はわずかに広く　1a類と異なって複合口縁である. 沈線文はやはり　2重の平行沈線による曲線文であるが　地文の縄文は斜走し　沈曲線内には　刺突列点文はなく　曲線文と曲線文の間にだけ見られる.

第1c類土器〔Fig7　PL34〕

第1b類と似てはいるが　竹管刺突による列点文はない.

以上の土器のうち1は　器表も内面も黒色で　内面はよく磨研してある. 8はやゝ褐色をおび内面は磨研　7は器質の点では　1の第1a類に近いが　2・4は或いは　第1bとしたものに類するかもしれない. 1は口径（図上復原）約25cm　厚さ6mm～7mmである.

第2類土器〔Fig 9－10・13　PL35〕

体部浅い縄文を施文し　3本の平行沈線を施文した土器. 3本は一本ずつ画かれている. 明るい黄褐色である. Fig11－2もこれに類するかもしれない.

第3類土器〔Fig11－1　PL34〕

斜めの細かい縄文を地文とし　縦に細くきわめて浅い平行沈線を画く. PL34にみえるように曲線が相対している部分も見られる. 厚い土器である.

第4類土器〔Fig10－8・9・11・12・15　Fig14右　PL 37〕

太目の丸棒状工具による　沈曲線文を施文した土器である. Fig10の11・8・12は　或いは　同15の部分かもしれない. 9はやゝ硬い.

Fig 10－15〔Fig14右 PL37〕は　壺である. Fig14右は復原図であるが　磨研されやゝ外反する口縁部と胴部文様帯の境界　即ち頸部のくびれに　列点文が横に竝び　これに接して1本の沈線が頸部をめぐる. 横走するやゝ太目のまばらな縄文を地文とし　この頸部の沈線文から　2本の平行沈線による曲線文が　下部に向って展開し　胴上半部では渦状文や蕨状文を刻し　胴下半部では　単に垂直な平行沈線となって終る. この点は　Fig 9の10・13と同じである.

この土器は　やゝ黒味をおびた褐色で　口径10cm　高さ13.5cm　胴最大径12cm　底径7cmで美しい.

Fig10－9の土器は　Fig 9－9のような土器のグループに入るべきものであろうが　便宜上ここに入れた.

第5類土器〔Fig 9－9　PL35〕

幅のせまい口縁部を　やゝ厚くつくり　撚糸の側面圧文を施文　体部には　斜行縄文の地文に

きわめて浅いが太目の　三条の平行沈線文を施文した土器である．これは大型の精製土器である．明るい黄褐色を呈する．

第６類土器〔Fig11－4　PL35〕

口縁におそらく相対に配した　４個の弁状の突起破片で　突起部上端の周縁と　内面には太い粘土紐をはりつけながら　他の口縁部はわずかに厚くつくり　沈線で口縁線を区切る．弁状突起の正面に　粘土紐による円環状の装飾文を貼付している．焼成よく硬く　淡黄灰色を呈し　厚さは1.5cm以上である．

第７類土器〔Fig11－11　PL36〕

明るい黄灰色で　焼成のわるい土器である壺型の下半部と考えられる．器面にはりつけたやゝ太い粘土紐で　平行隆起文　蕨状の渦巻文を作る．底部にしたがって　にわかに胴径を減ずる上半部は不明．現最大径（おそらく胴中央部）は７cm　底径６cmである．文様のモチーフから言えば　Fig10－15と同一である．内面は磨研してあるが　土器全体は粗質である．

第８類土器〔Fig11－６－８　PL35〕

硬い薄手の土器である．上記の第６類のようなモチーフの文様で飾ってあるが　隆帯は貼付け紐でなく　両側より丸棒状工具で　太目のやゝ深い沈線を刻み　両側より隆帯をもりあげたものであろう．器表に　黒色磨研の技法を用いている．口縁は　波状の突起をもつらしい．８は７の体部である．

第９類土器〔Fig11－９・10　PL35〕

前類同様の磨研土器で　硬い．口縁部の小破片で　口縁部には　２個１対の小さい山形突起をもち　おそらく笹管に縦の割目を入れ　それに交互に撚糸をからませた原体(多軸撚糸文)にによりロ縁上端部と　その下に　押圧文を施文している．山形突起は貼付である．黒色を呈し内面も滑らかである．

第１０類土器〔Fig10－６　PL35〕

口縁部は複合口縁で　断面三角形に作り　撚糸の等間隔押圧による施文で飾った点は　前者と共通するが　以下は沈線文である．この土器も　口縁に大きい４突起をもつ土器で　その突起を中心に　下に向って弧を画く　２重の平行沈線文を飾り　その弧の頂点から　更に両側に　同様の平行沈線で弧を画く文様をもつものであろう．

第１１類土器〔Fig11－３　PL35〕

厚く作った口縁部を　指先をひきながら溝状に作り　おそらく　周縁４ケ所に　指頭によるくぼみを作る．溝状の口縁には　細い粘土紐を貼りつけた　連続波状文を飾っている．やゝ外反した口縁には　斜行する浅い縄文を施文し　口縁と平行にめぐらせた一条の低い隆帯には　撚糸による押圧文が施文されている．焼成よく　硬い土器である．内面は磨研してある．

第１２類土器〔Fig10－16・17　PL35〕

黒色粗面の土器で　口縁は複合．断面を三角形に作る．この点は　Fig10－６と同様である．口

縁前面は　右斜めに撚糸の押圧文で飾り　体部は　結節ある縄文を廻転施文している．内面は磨研されている．

第13類土器〔Fig10—1～4　PL35〕

厚手の焼成の悪い　大型深鉢の口縁部である．口縁下に　低い隆帯を作り　二重にみえる．Fig10—13も　この種の土器で　ただやゝ薄いだけで　胎土その他は　全く同じである．

第14類土器〔Fig10—5　PL36上〕

大型の深鉢である．おそらく口縁に　2ないし4突起がある土器で　縄文以外には　何の装飾もない．

第15類土器〔Fig11—14　PL36上〕

複合口縁で　胎土は脆く　器壁はうすい．図上復原では口径22.5cmである．器面には　縦位の細い刷毛目文　または櫛目状の文様がある．色調は灰白色をおびて　光択がない．

第16類土器〔Fig10—14・Fig11—13・15・16　PL36上〕

いずれも縄文だけの土器である．たゞFig11—15だけは　器質がやゝ異なり　古い土器のように思われる．

其他　Fig9—11・12　Fig10—7は　次記の復原土器に類するので　省略する．他にFig10の10　Fig11の5についても　省略する．

第17類土器〔Fig12　PL38〕

Fig12の復原土器1は　先述のように　竪穴北端の出土で　貼床の下層に密着していたものである．底部を欠く．口縁部は外反し　撚糸による菱形のモチーフを押圧した口縁文様帯の下には細い隆帯があり　列点文で飾り　体部も　杢目状の撚糸文で　巧みに類似の文様を施文している．器壁は厚く　器表は黒色を呈する．口径20.5cm　現高約20cm．

第18類土器〔Fig13～15　PL39・40〕

ここに復原した3点の土器は　詳しく言えば　それぞれの類を設定すべきであろう．

Fig13上　Fig15—1　PL39の復原土器2は　複合口縁に　4個の突起をもち　体部上半が外反した土器で　底径は　小さいものと思われる．

口縁は　断面三角形を呈する複合口縁で　口縁部から体部上半まで　縄文を地文として　細い粘土紐で　美くしい装飾を器面に加える．口縁突起部の上面にも　縄文が施文され　2条ほどの粘土紐が　外面をめぐり　この突起部中心から　体中央部まで　二本の粘土紐による平行文が垂下し　先端をU字形にとじる．口縁部には　細い粘土紐による波形文を貼り　突起間の中央には2個の円形文を貼付している．突起部から垂下するU字形の紐からは　横走する粘土紐が走りこの間を∨または∧形の粘土紐で　たくみに埋める．中央垂下紐の左右は　必ずしも相称ではない．粘土紐の上には　縄文の施文はない　この土器で目立つことは　粘土紐の施文デザインに際して細線によらず　爪を斜めに列点状に押し　大体この線にそい粘土紐をはりつけてあることである．

この土器は　口径（突起部で）22cm　低い口縁で18cm　高さ推定25.5cmである．色択は黒色を

帯びた褐色で　内面も磨研してある．

復原土器３〔Fig13下・17－２　PL40左〕

復原土器２に似た土器であるが　小型で　口縁の４突起の中間に　山形突起が１個つく．

口縁の主突起の直下には　粘土瘤を付け　ここから　１本の粘土紐が垂下する．これを中心に左右に　口縁に平行な上向きの２本の粘土紐　以下水平な粘土紐を５～６本はりつける．この粘土紐は　突起から垂下する粘土紐から　魚網状モチーフを作るところが少し異なり　また弧状に変曲することはない．

地文の縄文は細かく　粘土紐上にも　施文されている．色調は　濃い褐色を呈する．口径は主突起部で18.5cm　口縁中央の突起間で16cmある　高さ20cm　底径7.5cmである．

Fig14上左・15－3　PL40右は復原土器の４である．前２土器と同一モチーフの　細い粘土紐の貼

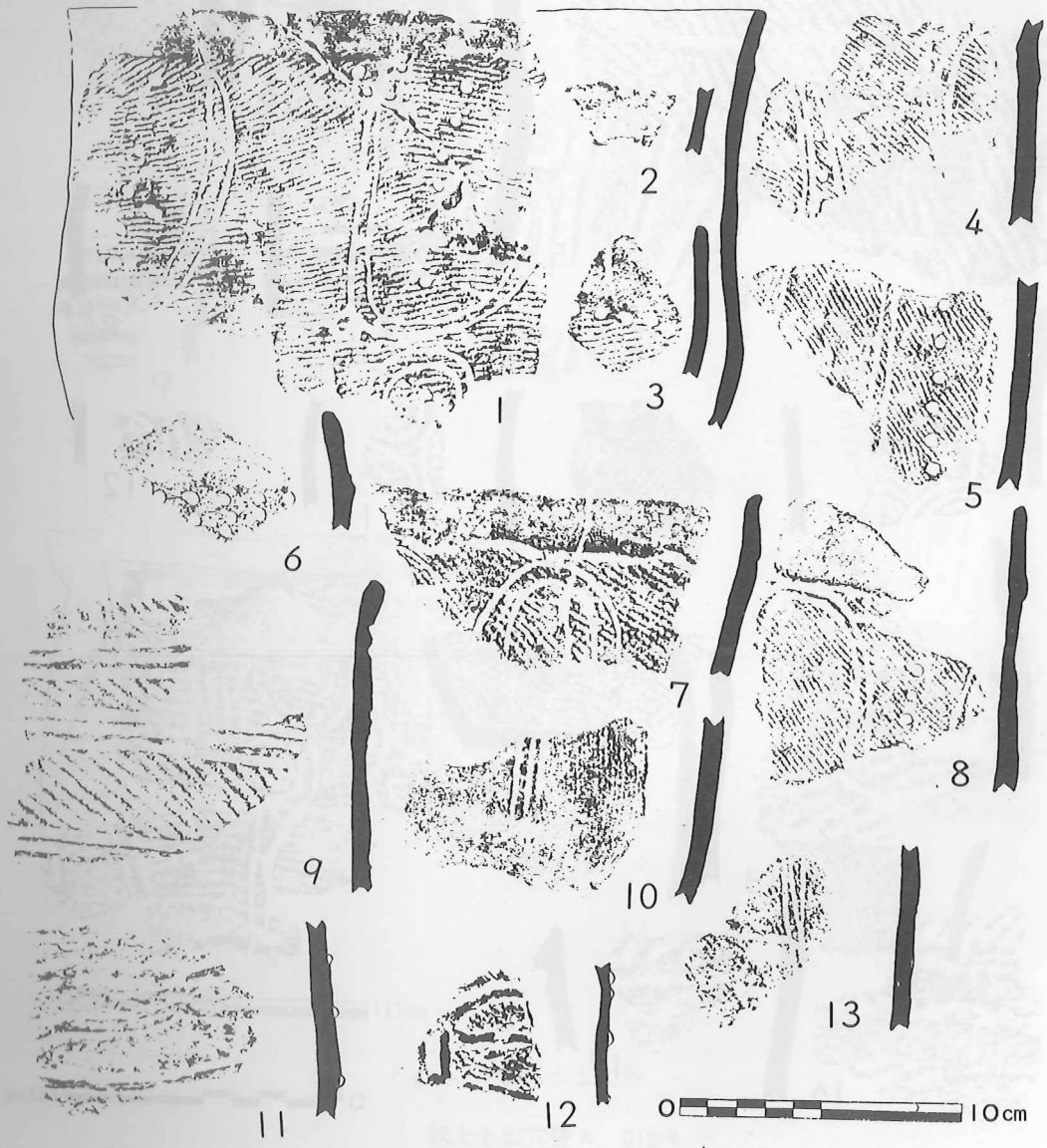


Fig9　A竪穴出土土器

付文を飾り　わずかに残る口縁の１部には　同様の粘土紐による波形貼付文がある．器形はやゝ壺型で　胴中央部が外に張り　胴中央部以下の右斜縄文より　上半部の縄文の傾斜がゆるい．うすく　繊細な感じの土器である．口縁の形は　欠失していて不明である．現高17cm　底径７cmである．

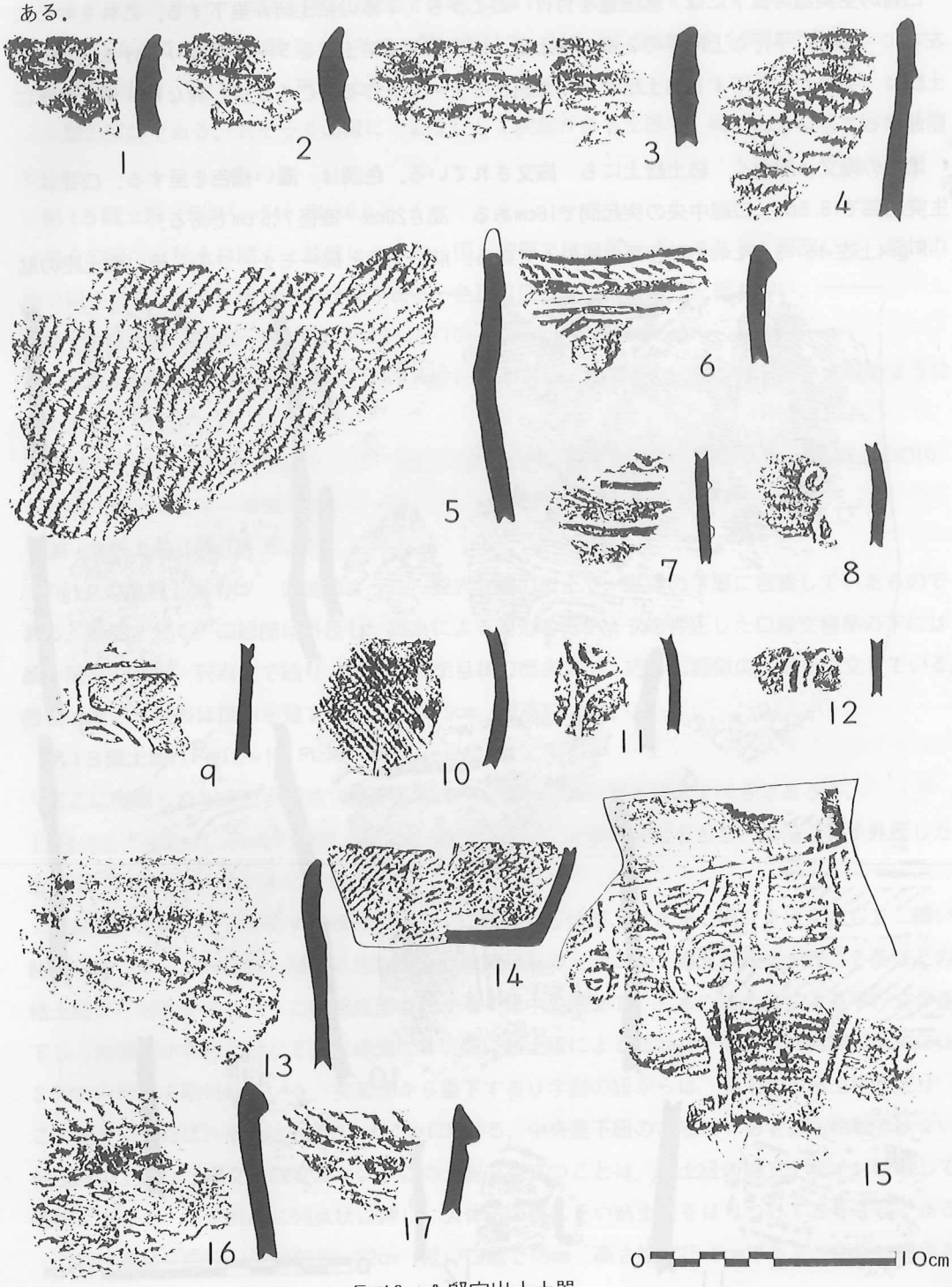


Fig10　A竪穴出土土器

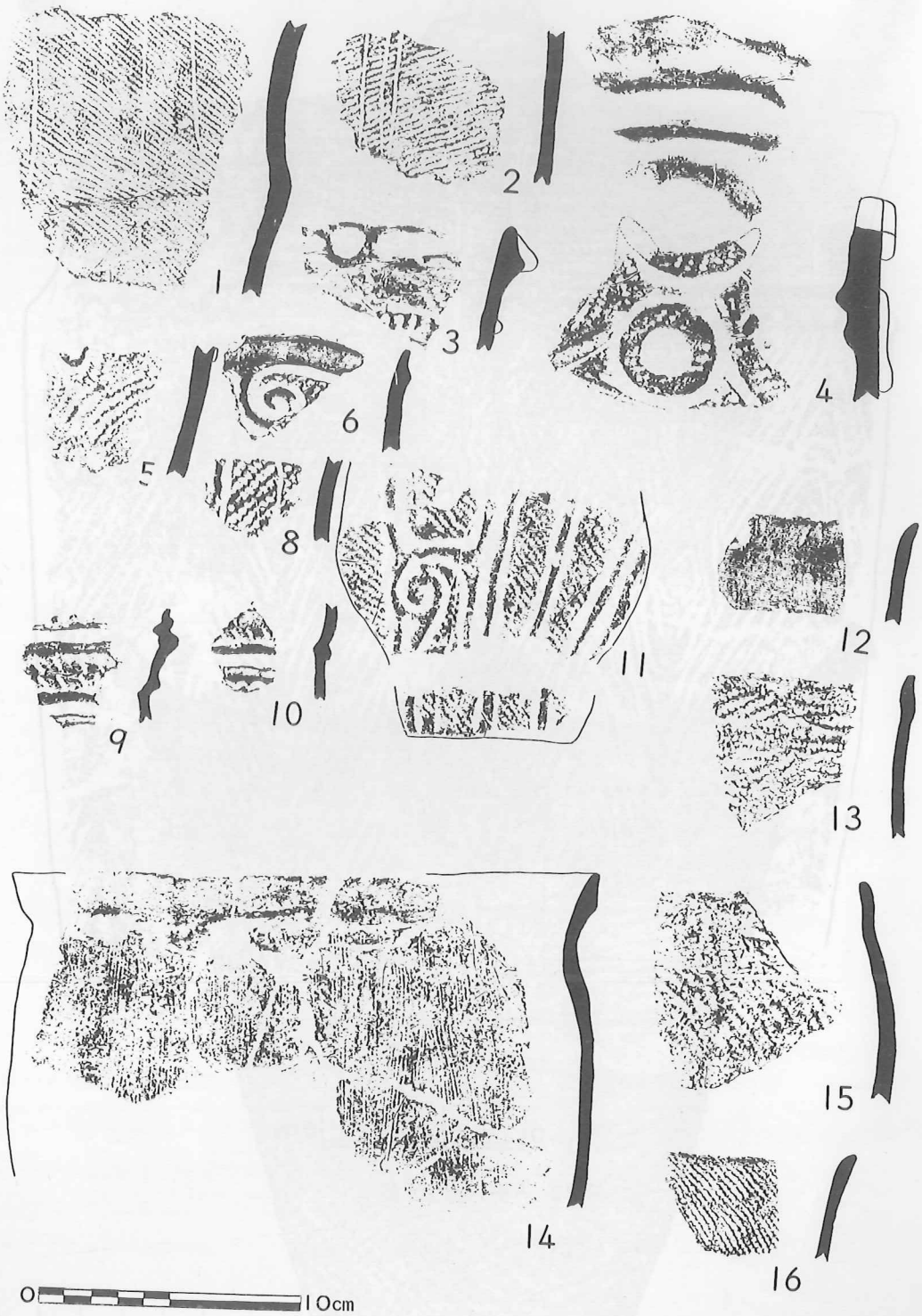


Fig11　A竪穴出土土器

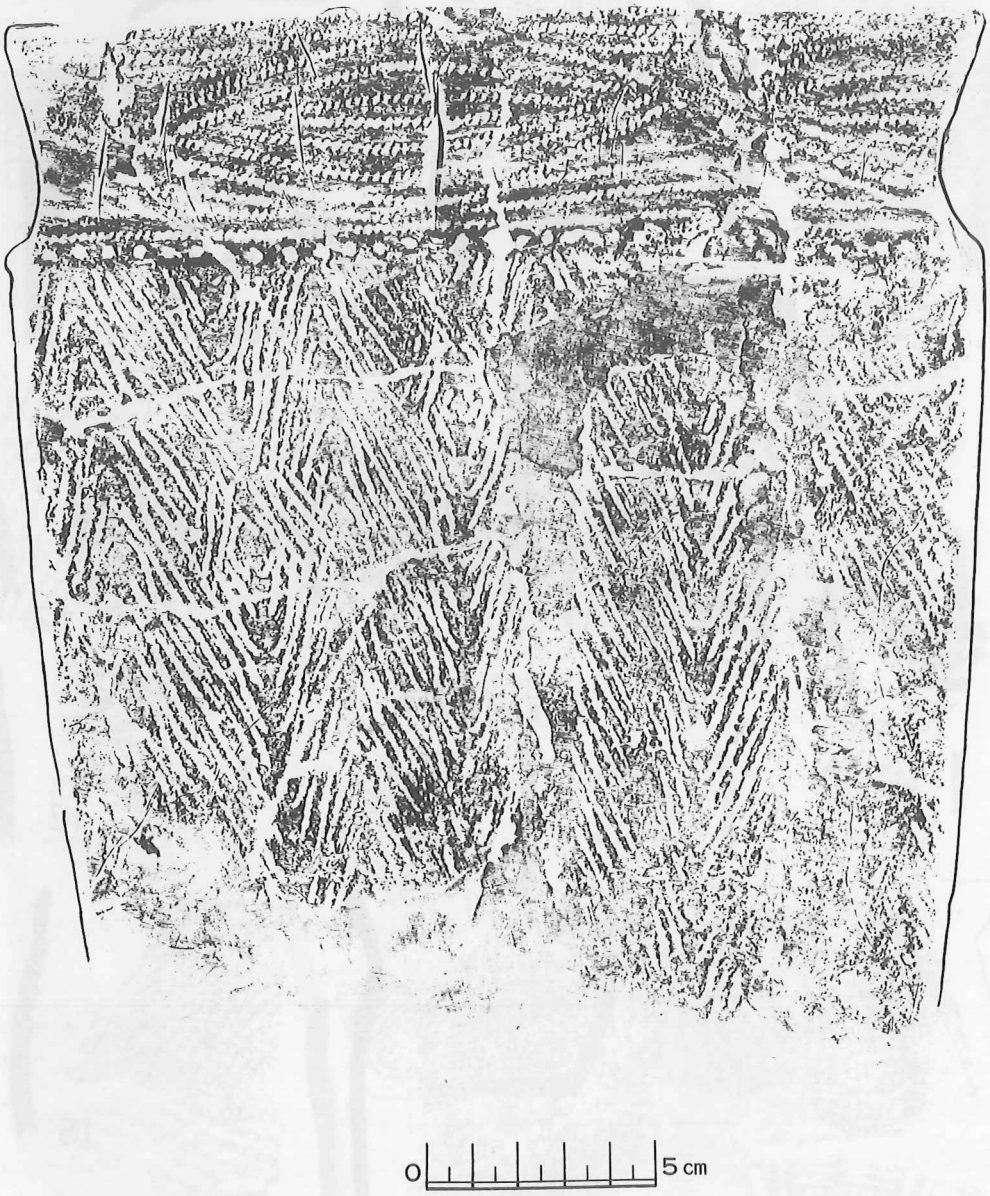


Fig12　A 竪穴出土土器 1

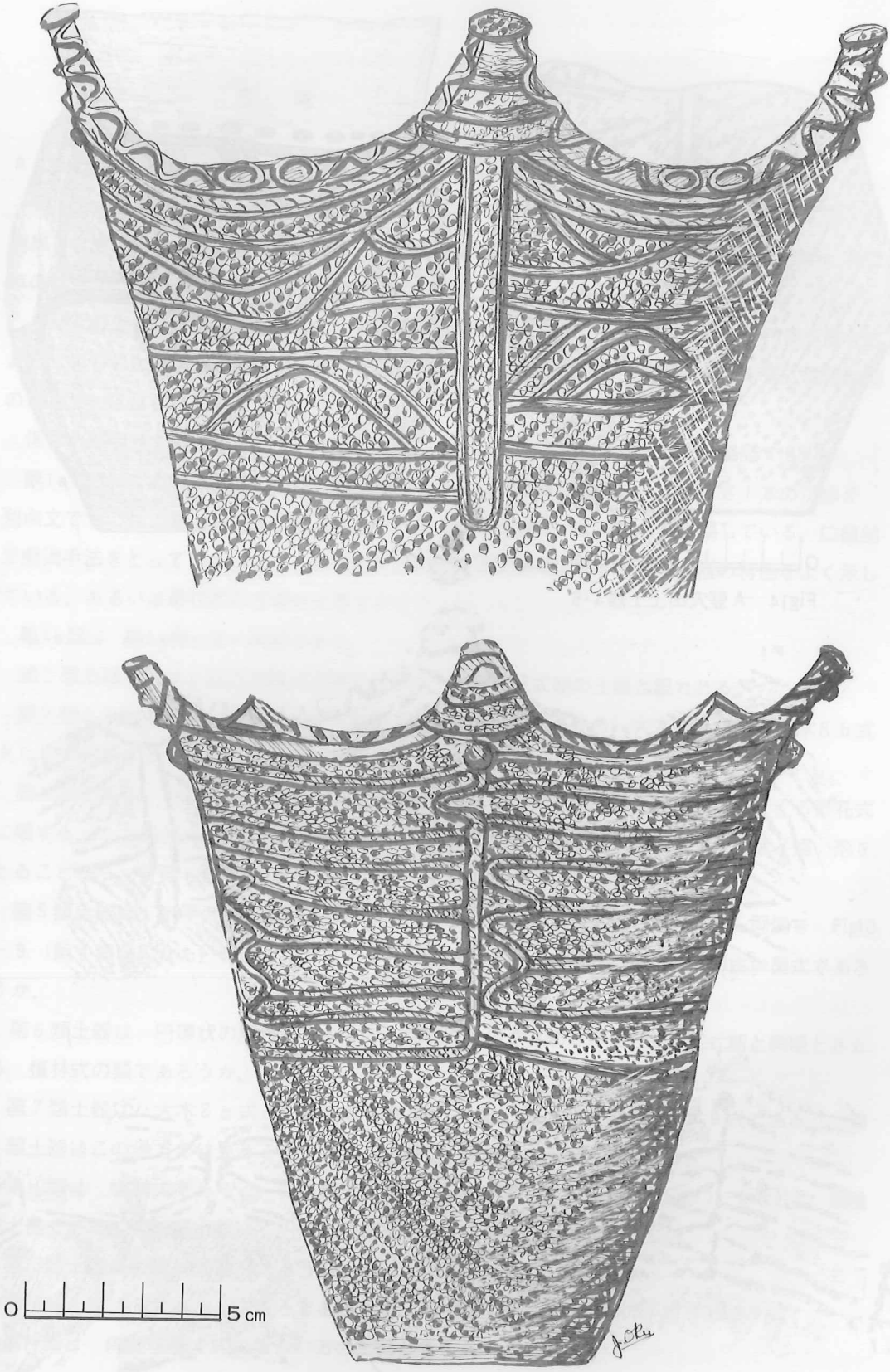


Fig13　A 竪穴出土土器2・3

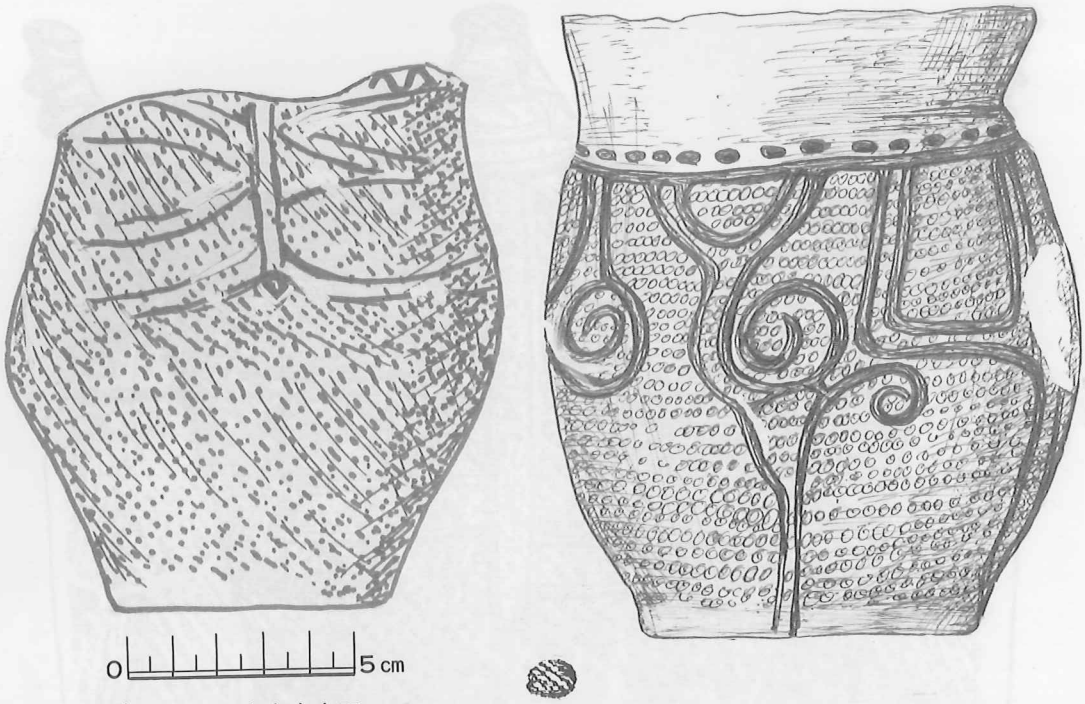


Fig14　A竪穴出土土器4・5

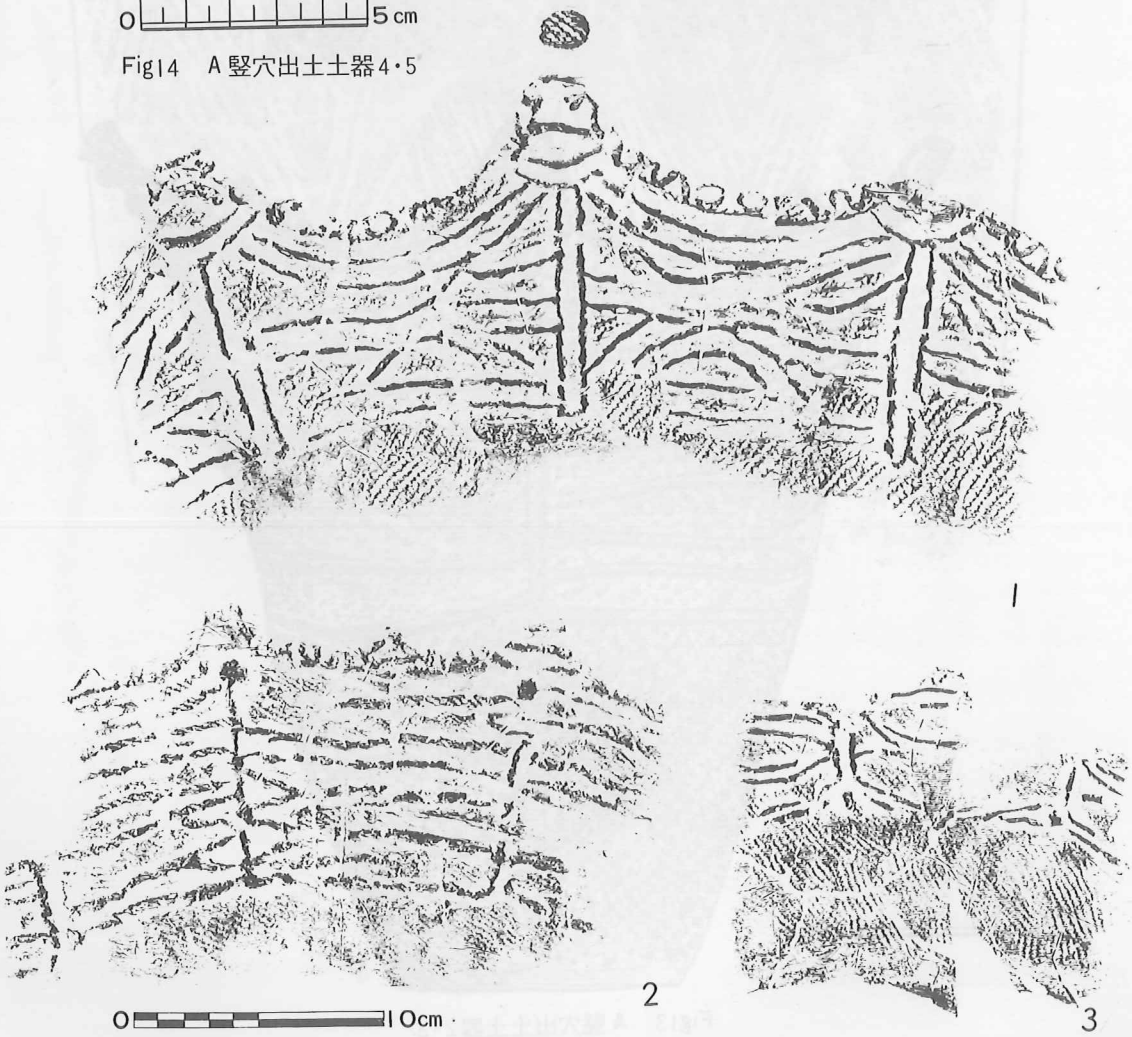


Fig15　土器2・3・4拓影図

Ⅲ　考　　察

A　土器について

B住居址の床面　小石に囲まれた　直立土器（胴下部だけ）は　密に撚糸文を施文し　胎土に繊維を含むことなどから　縄文前期の　円筒式土器であると考えられる．その用途性質は　発見事の状況から　一般の土器とやゝ異なるものと推定される．

A竪穴の土器で　最も古いものは　南西部あたりに散乱していた　繊維土器で　円筒下層a式あたりのものと考えられたが　これは貼床の下部に　残存していたもので　長方形竪穴掘作以前の遺物で　ほぼB住居址と同時であろう．

他は1部例外をのぞいて　Fig 9～17の土器である．これについては　以下に略記する．

第1a類としたものは　たとえば　Fig-1のように　本来は口縁下にめぐるべき1本の沈線が列点文で　これよりはじまるU字形が　鈎針状になる土器が　よく特色を表現している．口縁部が磨消手法をとっていることと　針状の沈線文は　縄文後期に移るころの土器の特色をよく示している．あるいは最花式の古期の土器であろう．

第1b類は　第1a類とほゞ同期である．

第2類土器は　体上部の文様が不明であるが　大体最花式期の土器と思われる。

第3類としたものは　第2類とほゞ同期であるが　器形の点から　大木式系統で　大木8b式あたりに相当するであろうか。

第4類土器は　いわゆる一種の懸垂文渦巻を施文した土器で　円筒上層E式の次にくる最花式に類する．なお最花式を円筒上層F式と呼称することは[1]　この土器が円筒形とは　ほど遠い形をとることから　賛同しかねる．

第5類土器は　水平の平行沈線が　そのまゝ体をめぐるか否か不明である．もし両側で　Fig10－9（第4類に入れた）のようになるとすれば別であるが　おそらく最花式期の古い型式であろうか．

第6類土器は　円環状の貼付文があるが　沈線が口縁を区切る点など　最花式期と同期とされる　榎林式の類であろうか．

第7類土器は　大木8b式といわれるものと思われる．第8類土器は　大木9式であろう．第9類土器はこの地方では見ることが少なく　最花―榎林期の土器と思われる．

第10類は　榎林式であろう．第11類土器はやはり　大木8b式であり　Fig10－9などと　同種の土器である．第12類土器は　円筒上層E式であろうか．

第13類土器は　榎林式期であろうか．

第14類土器は　大木8b式ごろであろうか．第15類土器は　最花期の土器であろう．

第17類は　円筒下層d式の新しい方の土器と考えられる．

第18類とした　復原土器の３個は　円筒上層Ｄ式またはＥ式であろう．Ｄ式としても　Ｅ式に近い種類と考えられる．

Ｂ　住居址について

ここに　床面レベルの異なる２個の住居址が検出された．そのＡは竪穴であり　Ｂは竪穴壁の検出ができない事情により　単に住居址と呼んだ．またＢ住居址を発見したトレンチの南端近く明らかに　柱穴などを伴う他の住居址も発見したが　耕地の都合から　発掘できなかった．東隣りのホップ畑にも　道路をへだてた南の杉苗圃にも　遺物が多量に埋蔵することが知られ　附近一帯の地中には　住居址群がある．

Ａ竪穴の北部　炉の東側の一劃には　円筒上層式期の土器が　復原できる形で数個出土した．他の土器は　この部分の南側　竪穴の東壁よりに　数ケ所集中的に出土した．円筒下層ａ式土器は　Ａ竪穴北側の　他の先行竪穴の土器であろう．また福館遺跡と同期の土器が　南側の床面りに　散在していた．

竪穴の炉を中心としたあたりは　明らかに円形に近い竪穴が　長方形の竪穴を掘りこんでいるように見えるが　あるいは　単に床面が同一レベルで　たまたま　どちらかの竪穴を造る際に先在した拡がりを　発見していたのかもしれない．

しかし　炉付近の床面には　やゝ粘性の貼床があり　その剝理面は青味を帯び　同じような色調の床面が　長方型竪穴の中央西壁近くでもみられたことから　ある時期に　同時の生活床面であったといえよう．

長方型竪穴には　規則正しい間隔で　対称位置に　深い柱穴があり　しかもかなりの大きい柱を建てたものと考えられる．また南西側の床面下に　長円形の低い掘り下りがあり　周辺に小さい柱穴列がならび　床面には小石の混在が多く　竪穴の他の部分とは異質であった．他に　特色ある点は　大きい柱穴のそばに　２本ずつの　副柱のような細い柱穴が　それぞれに付属していることである．

炉の石囲は　ていねいに作られ　周囲床面の保存は良好で　しかも炉の西側　縁石にそって２個の厚くないが　やゝ広い平面をもつ河原石が　あたかも　食器または食物を置く卓のようにおかれ　近くには　大きい割れた石皿の２片が　床面におかれていた．このように　生活の痕跡を残している．

しかし　広い床面長方形の床面中央～南半の　どこにも炉がないのは　いささか奇異である．また　南西側の　小柱列で囲んだ低凹部は　何の遺物もないが　あるいは小動物などを飼育した区劃かもしれない　と推定するだけである．

中・南部床面の土器の出土状態のほか　石器の出土がないこと　また利用した河原石だけが置き残されていた事実も　注意をひいた．これらの意味するものは　使用にたえる土器　または利器が　すべて他に移動されていることである．その原因が何であるか　不明のまゝである．

C 当時の気候について

ここで　関心ある市民諸氏から　しばしば質問をうける　当時生活の未開性と　その気象条件について　福館遺跡出土の土器とほゞ同期の　奥羽地方北半西部の遺跡のうち　当時の海水温（潮流の水温の寒暖は　気温を支配し　また間接的にそれを示している）を示す食物残滓である貝塚の貝によって　大略説明しておきたい．

この先史気候については　市史本文で現地資料に基き　再び充分に説明することにしたい．

八郎潟の西岸　角間崎貝塚[2]は　潟岸からやゝはなれて　高い崖を作る洪積期の潟西層上にある．この貝塚の発掘には　筆者（奥山）も参加し　同窓西村君が貝類を担当したが　土器は　津軽の浮橋貝塚や　茂屋下岱遺跡　そして福館遺跡と　ほゞ同時代である．

地質学では　これら遺跡の時代（も含めているらしい）と　それ以前の縄文早期を　貝相で表現し*Ostrea*湾の時代と呼び　縄文早～前期海進と呼んでいる．事実八郎潟の湖底堆積層は　侵蝕された潟西層の谷の部分の　泥岸質堆積物の上に　*Ostrea gigea bed* がみられる．

しかし　角間崎貝塚では　*Ostrea gigas* は見られず　われわれが見た貝は *Monodonta labio*（イシダタミ）*Tegula* (*Chlorostoma*) *rustica*(コシダカガンガラ) *T* (*Ch*) *carpenteri*（オオコシダカガンガラ）　*Turbo* (*Batillus*) *cornutus* (サザエ) *Hemifusus ternatanus*（テングニシ）*Babyronia japonica*（バイ）　*Anadara* (*Scapharea*) *subcrenata*（サルボウ）*Meretrix meretrix*（ハマグリ）　*M. Iamarckii*（チョウセンハマグリ）　*Cyclina orientalis*（オキシジミ）　*Tapes japonica*（アサリ）　*Gomphina melanaegis*（コタマガイ）*Corbicule japonica*（ヤマトシジミ）であった．

このうち　*Ostrea japonica* と *Meretrix meretrix* は　全体の83%の量を示している　もちろんこれは　食物残滓であって　これだけが近海の貝のすべてではないが　これらの*fauna*は　現在の日本では　中部地方の貝相ぐらいにあたると言えそうである．現在の男鹿周辺はに　*O. lamarckii* はない．

また　浮橋貝塚も　淡水貝塚であるが　海浸当時の海から採集した食用貝の残滓として *Ostrea* (*Crassostorea*) *lapilousii*（マガキ）が見られ　他に主として*Corbicula japonica Meretrix mererix* を多く残している．量の少ない種を除けば　*Protothaca edoensis*（オニアサリ）*Anadara* (*Seafrea*) *subcrenata* *Natica didyma*（ツメタガイ）*Phalium strigata*（カズラガイ）　*Concellaria spenguleriana*（コロモガイ）　*Lemintina imbricata*（オオヘビガイ）などが報告されていてやはりより温暖な海水温を示している．

海の条件が　男鹿とは異るようではあるが　いずれにせよ　当時の日本海岸は　暖・寒流混合の状況であったし　また降雪とか日照とかの　天候条件が　自然人の生活にとって　好条件であったと言えよう．

なお　八郎潟の場合*Ostrea bed* の上の　*Macoma bed* を　周辺の段丘面に対比すると　60m

段丘に相当し　大館地方のように　60m段丘が　火砕流と　その2次層で形成されている場合では　縄文早期の土器は　この火砕流面以上の段丘　または　その高位部の下層から発見される可能性が強い.

総　　括

大館市史編さん資料の探査のため　昭和46年10月と仝年11月の数日　市北部の　福館・橋桁野の　一地点で実施した　発掘調査の結果は　発掘地点が畑地のため　制約をうけたが　福館においては　縄文前期前半の末期から後半の初葉までの　円筒系土器の出土をたしかめ　それが　橋桁野地区の南半から連続した　広い面積にわたる　住居址群の存在の事実を感知させた.

また橋桁野においては　この期の住居址の一部と　これに切りこんだ　長方形大型の竪穴を発見した. 遺物から　その一部は縄文前期終末期の住居址と重復するが　他の部分は　整った石囲炉をもった　縄文中期末の円筒上層式から　次期の最花式（榎林式）期の　奥羽地方北端の其期文化と　大木8ｂ式など　南半の同期文化の波及混在をたしかめた. この期文化に近い竪穴の一部は　かって鹿角市大湯黒森山麓[3]で調査されたことがある.

土器の出土は　福館地区では　いずれも破片であるが　その南部より　北部に向って時代が下降　累層している事実が確かめられ　また　土師器の一型式と小坂Ｘ式・後北Ｃ式土器が　きわめて近接した時期のものである消息を知った.　後北Ｃ式土器の出土は　大館市内では　ここが最初である.

中期末文化は　どちらかといえば　北方からの波及が強く　青森県下の　縄文中期末葉と　同じ文化圏域に属する.

この地は　表土が厚く　日程と土地の関係から　わずかの発掘しかできなかったが　広大な段丘面に存在するであろう　大遺跡群から言えば　大海に一粒の粟をさがしたにすぎない. 発掘期間後半は　天候の急変にあい　吹雪におゝわれた日があった.

われわれは　雪の旧街道〔PL 41〕をあとにして　しばらくこの地を離れる.

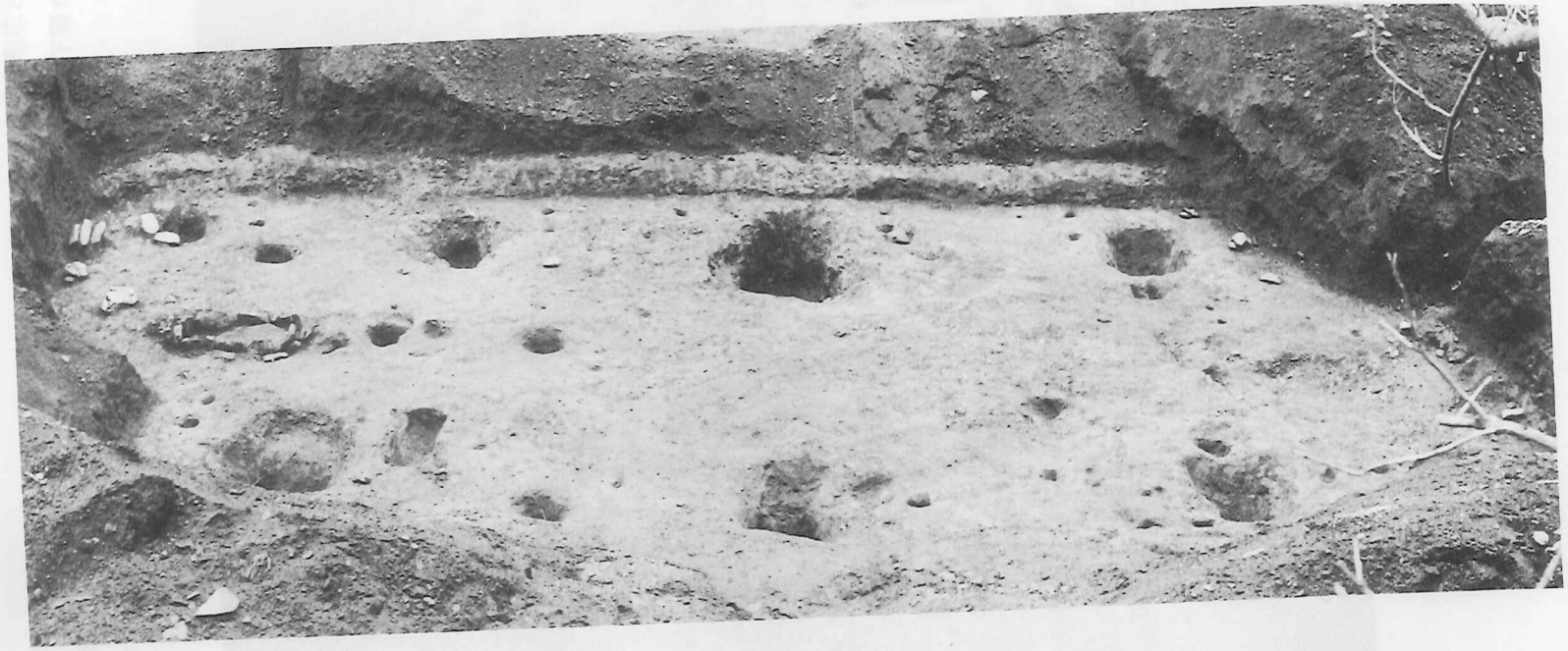
---

(1) 江坂輝弥篇『石神遺跡』　1970

(2) 奥山　潤　角間崎貝塚「秋田考古学」　21・1962

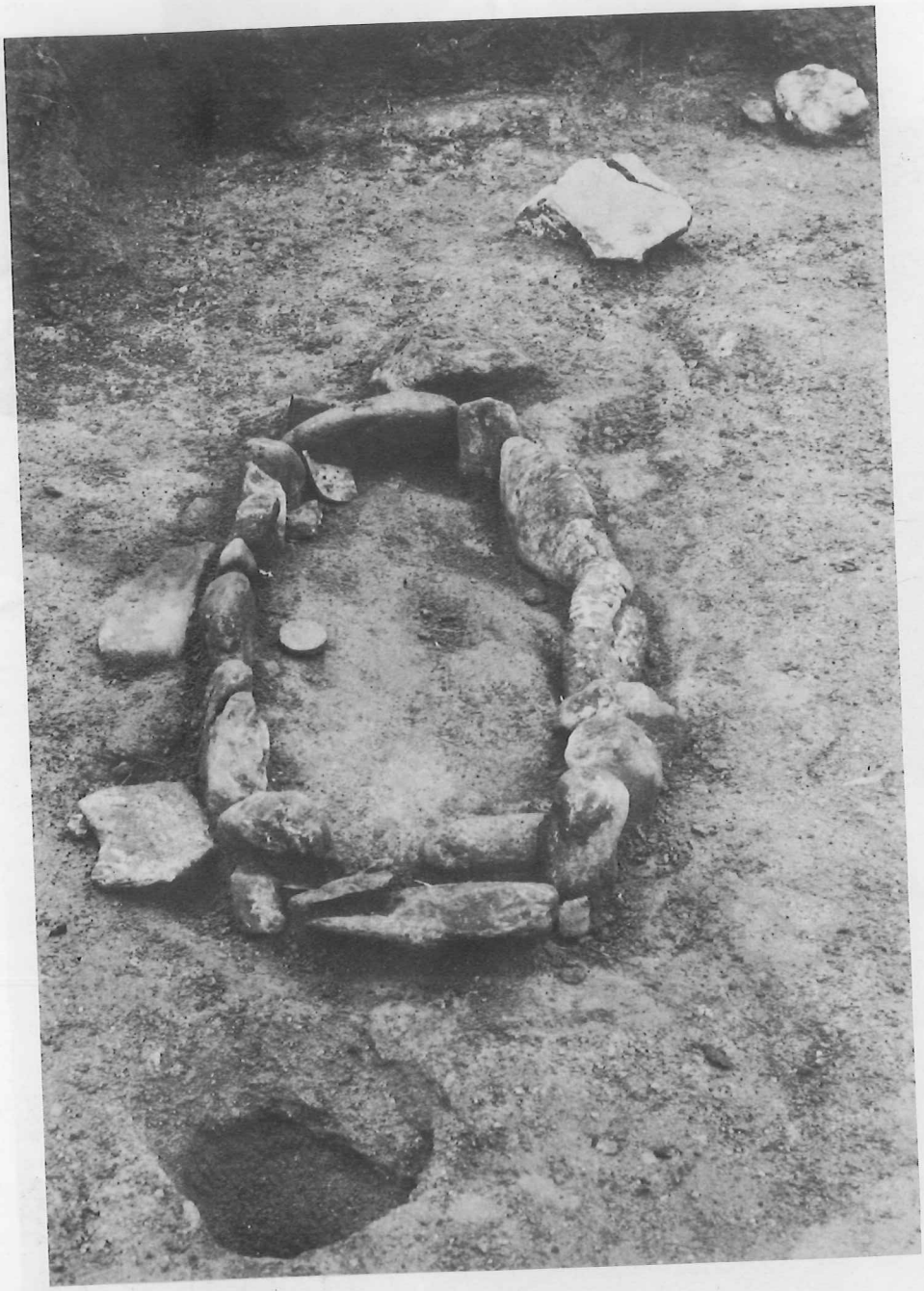
(3) 奥山　潤・大里勝蔵『黒森山麓縄文期竪穴群』　1971－2　十和田町教委

PL26　A 竪穴（北より）



PL27　A竪穴（東より）

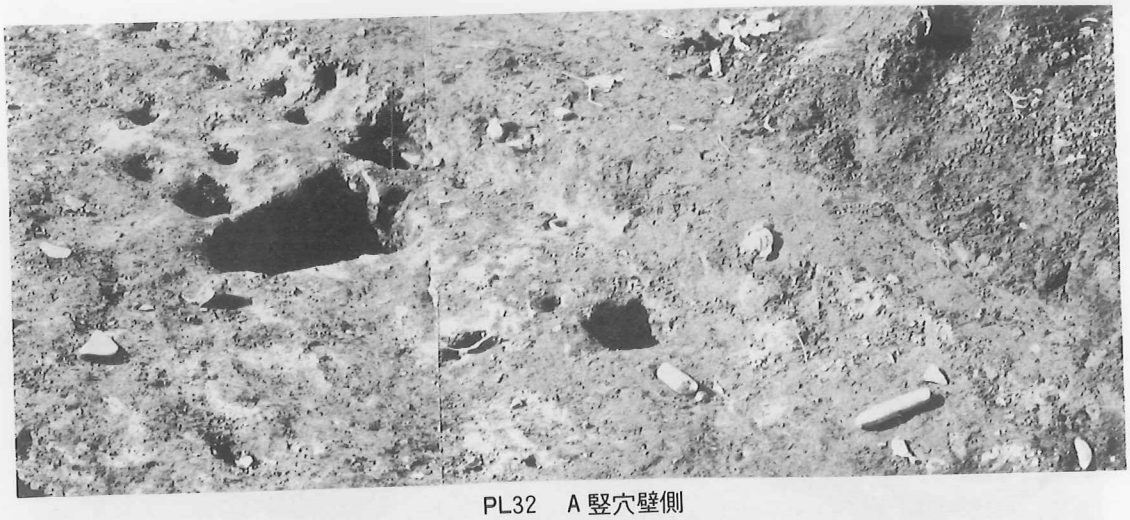
PL28　A 竪穴北東側



PL29　A竪穴炉址（南より）

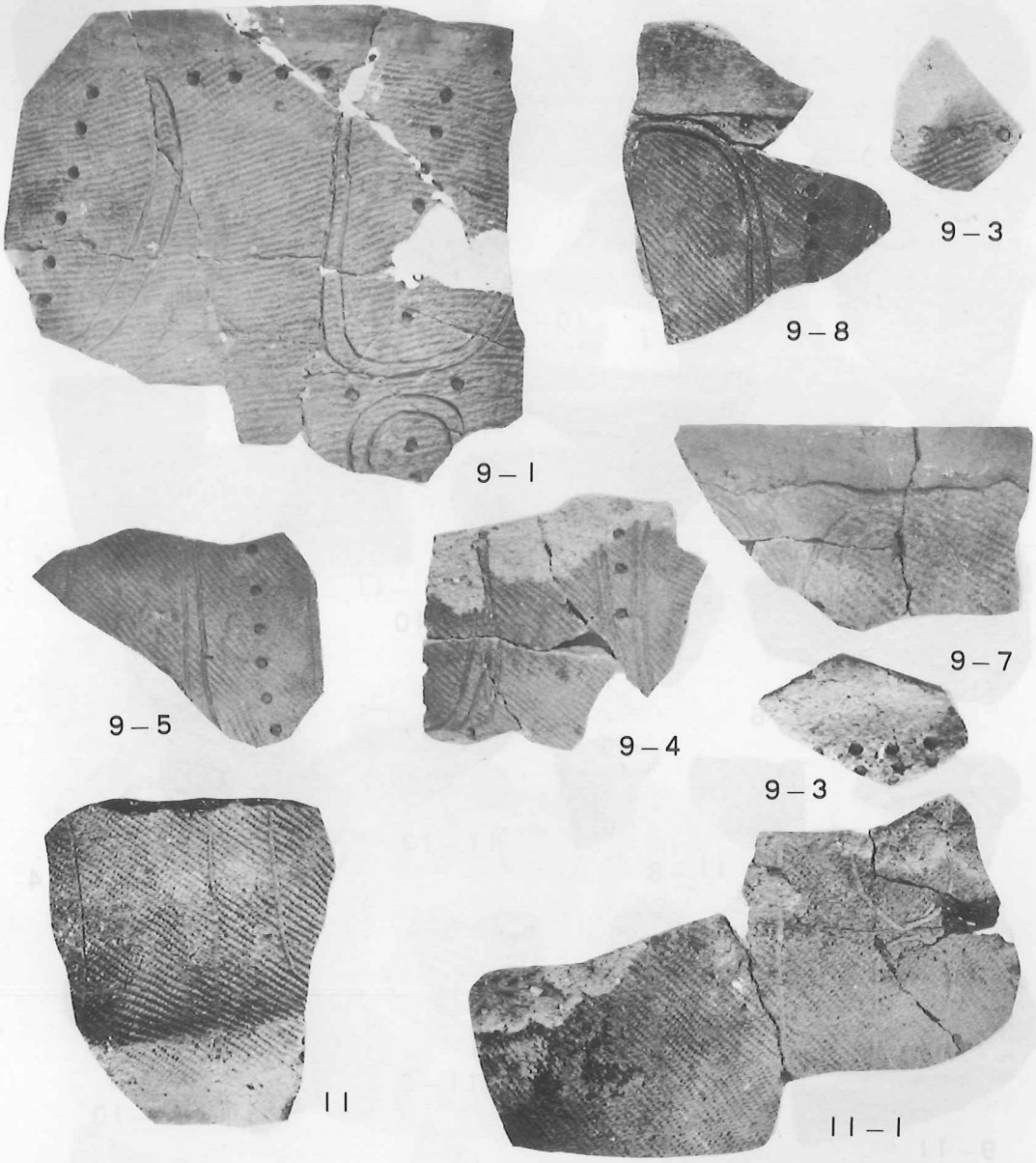
PL30　A 竪穴炉址とその北東側

PL31　A 竪穴南西隅の施設

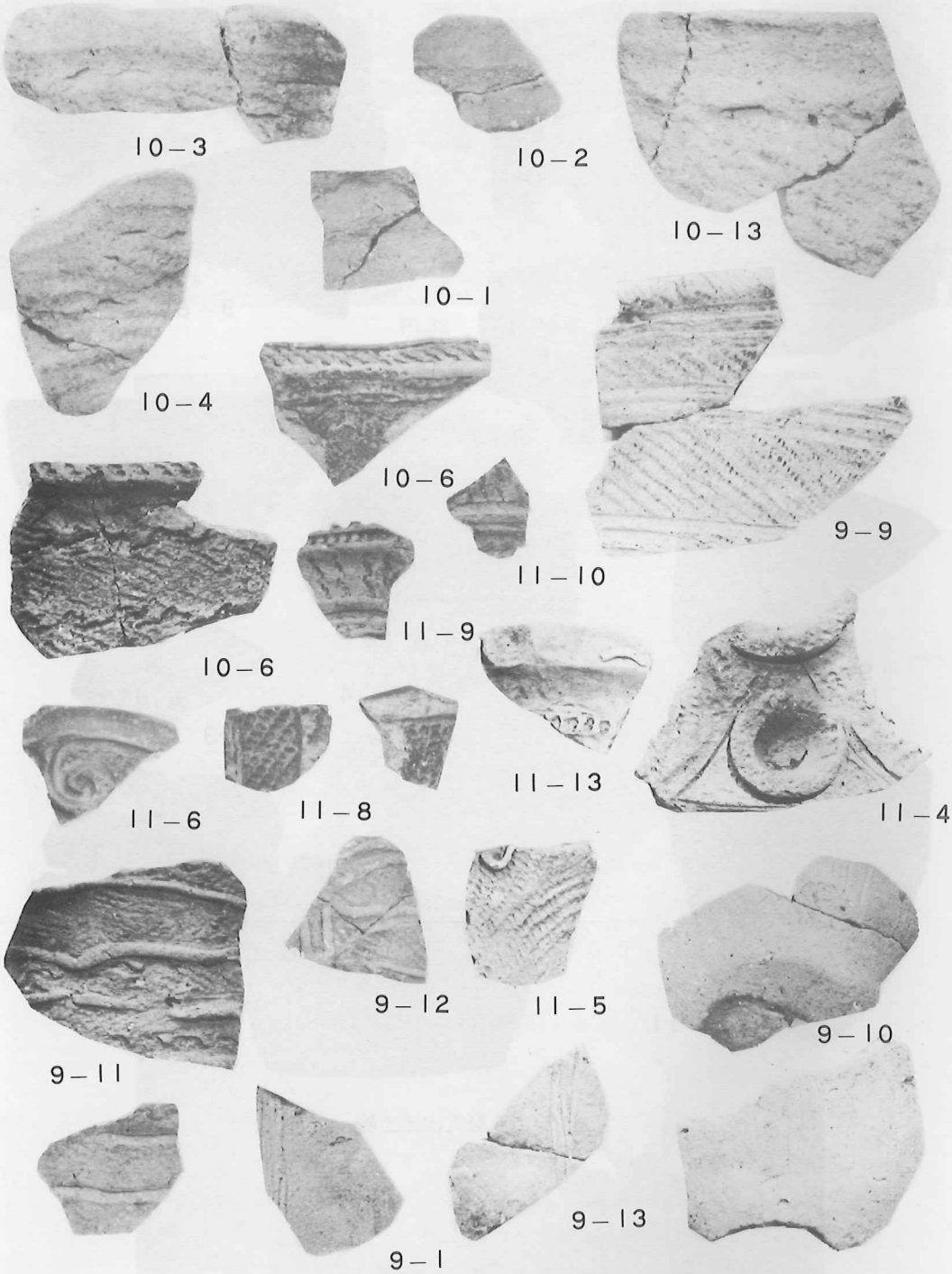


PL32　A 竪穴壁側

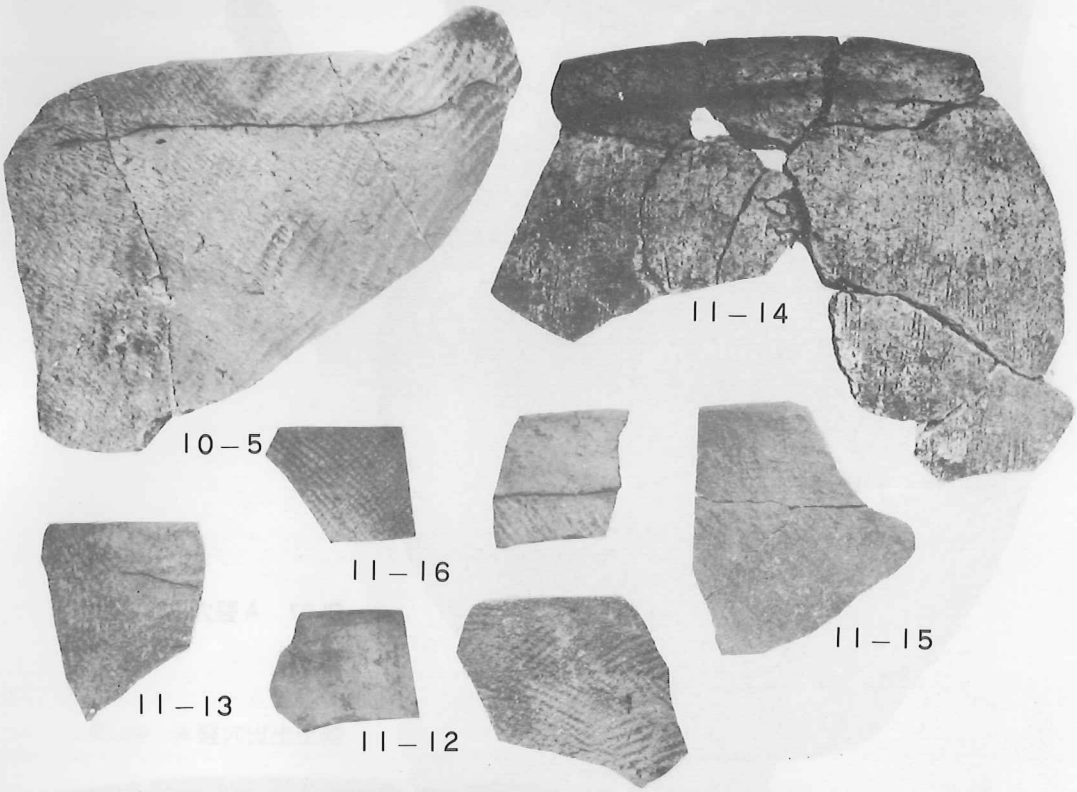
PL33　A 竪穴ピットの 1



PL34　A 竪穴出土土器



PL35　A 竪穴出土土器

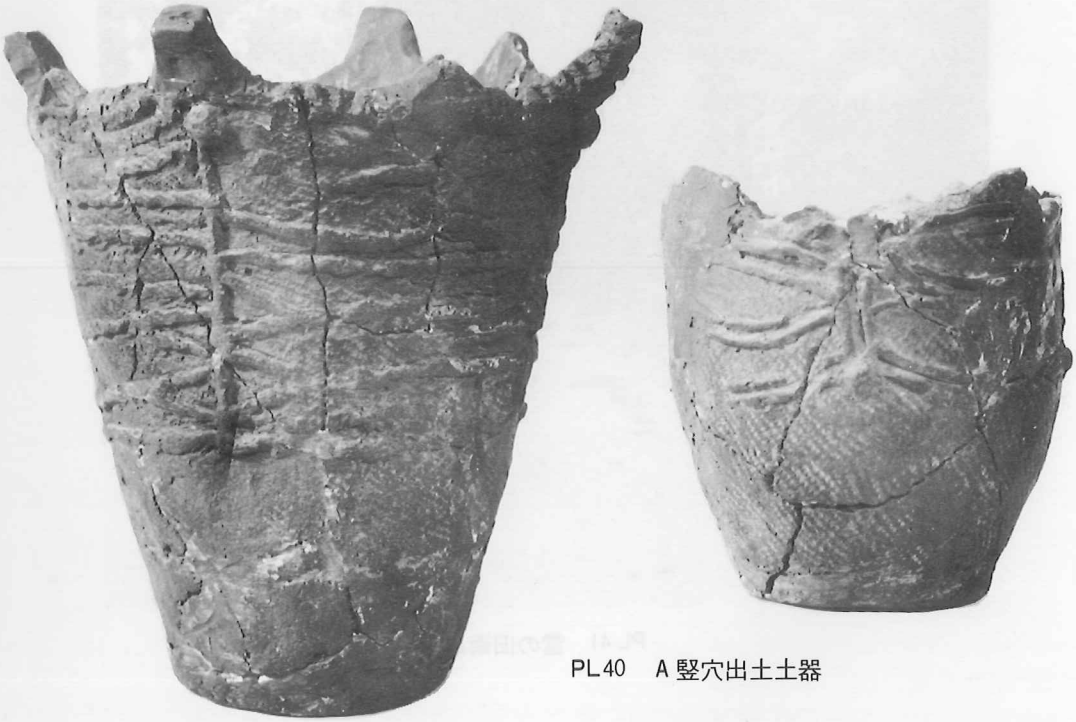


PL36 (上)(下) A竪穴出土土器

PL37　A 竪穴出土土器

PL38　A 竪穴出土土器

PL39　A 竪穴出土土器



PL40　A 竪穴出土土器

PL 41　雪の旧街道

大館市史編さん調査資料第7集

福館遺物包含地
橋桁野竪穴住居址 発掘調査概報

奥　山　　潤
1973－5

大館市三の丸　13の1
大館市史編さん委員会

印刷　大館市谷地町後　(有)大館孔版社